
とある少女の恋愛作戦

バナケソ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少女の恋愛作戦

【Nコード】

N5406L

【作者名】

バナケソ

【あらすじ】

御坂美琴が上条当麻に積極アプローチ！？ 3人の少女による恋愛劇が今幕を開ける…
御坂美琴、佐天涙子、初春飾利の3人を中心に進む恋愛ストーリーです。

第1話：とある後輩の思い付き（前書き）

ややダークな内容ですが、みなさんを極力不愉快にさせる事の無いよう細心の注意を払ってストーリー展開していきますので宜しくお願ひします。

第1話：とある後輩の思い付き

とあるファミレスの4人席で、3人の女の子達が世間話に花を咲かせている。

そのうちの一人は、学園3位の能力者、御坂美琴である。

そして向かい側に座っている二人組は、佐天涙子と初春飾利。

二人は御坂の後輩の白井黒子の友達であり、御坂とも比較的気が合うためこうして集まって食事する事が多かった。そしておしゃべりの内容はお互いの学校生活や流行りのテレビ番組、そしてこの場にはない白井黒子の事など、他愛の無いものであった。

佐天がとある話題を切り出すまでは。

「ところで御坂さん、例の人とはどうなったんですか？」

「ぶっ…」

やはり今日も来た。最近はこうやって集まると、後輩二人は決まってこの話題を振ってくるのだ。この事が、御坂にとってちよつとした悩みの種になっていた。『例の男』とはもちろん、上条当麻の事である。

ちなみに上条の存在を突き止めたのは初春であった。白井がよく『殿方』『猿人類』といった単語を口に出す事を疑問に思った初春が、白井からそれとなく聞き出してしまったらしい。その日からというもの、二人は上条と御坂の仲について興味津津であり、会う度に質問攻めである。二人とも上条との面識がほとんど無い事も、余計に興味を増幅させる原因となっていた。

佐天「今週は会ったんですか!？」

初春「向こうからメールとか来たりするんですかー!？」

適当に受け流しても。すぐに別の質問が飛んでくる。いつもならこの話題が出ると割と早い段階で白井が取り乱し始めて話題を断ち切ってくれるのだが、あいにく今日は不在。長期戦は避けられなさうになかった。

そして今、後輩二人は目を輝かせてこちらが切り出す言葉を待っている。

御坂「(今後もずっとこんな事を聞かれ続けるのはたまらないわ…今日こそは、アイツに興味なんて無い事を二人に分からせなくっちゃ!」

御坂は、今後の食事が全て自分への尋問会となる事を危惧し、そのような事態を防ぐべく二人に向かって口を開いた。

「二人とも！何度も言うけど、あたしはアイツに興味なんか無いし、これからだって何も無いわよ。そりゃあ色々な恩はあるし感謝もしてるけど、それだけの事。あなた達の思っているような関係なんかじゃないの。だからこの話は今日で終わり！」

「…え〜っ…」

強引に終結させようとする御坂に、納得いかない様子の後輩二人。

佐天「御坂さん、目が泳いでますよ…興味が無いなんて本当なんですか〜」

御坂「ほ、本当だってば！だいたいあいつはムカつくヤツなのよ！デリカシー無いし、いっつも違う女にちょっかい出してる女たらしだし、この前だって…」

結局、この話題を断ち切れなかったのは御坂自身だった。

何かのスイッチが入り、顔をやや赤らめながら上条への不満を延々と語り出した。

その内容には上条の行動の細部も含まれており、二人には惚気話にしか聞こえなかった。

「…（御坂さん、それで興味無いなんて言われても説得力無いですよ…）」

心の中で突っ込みを入れる二人。
二人から見ると御坂が『例の人』に惚れている事は明らかなのだが、
どうやら御坂本人にはその自覚が無く、それどころか本気で『ムカ
つく奴』と思い込んでいるようなのである。

とりあえず今日はこれ以上新しい話は聞けそうにないかな、と二
人は諦めかけたが、その話題を変えようとした矢先に佐天はあるア
イデアを思い付き、口を開いた。

「そつだ御坂さん！わたし良い事思い付きましたよ！」

先ほど以上に目を輝かせ始めた佐天を見て、御坂は焦った。

まさか、上条を今から呼び出すとか、3人で会いに行こうとか言い
出さないだろうか、と。

しかし、佐天の口から飛び出した言葉は、御坂の想像を遥かに超え
る内容であった。

「その人を御坂さんに惚れさせて、告白させてからわざと振るって
のはどうですか！」

第1話…とある後輩の思い付き（後書き）

こんな内容ですが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

第2話：とある後輩の思い付き 2

食事と（8割おしゃべり）を終えた3人は解散し、初春と佐天は帰り道を歩いていった。

2人の会話の内容はもちろん、ファミレスでのやり取りの続きである。

「大丈夫なんですか佐天さん、あんな事言っちゃって…」

「だって、こうでもしなきゃ二人は絶対結ばれないと思わない？」

二人から見ると御坂が上条という男に惚れている事は明らかなのだが、当の御坂にはその自覚は無く、本気で『興味が無い』と思いついでいるのである。対する上条とやらも、御坂の話から察するにどうやら相当に鈍い男であるようだ。そして、こんな二人を放っておいても結ばれっこない、ならば自分たちが手助けしよう、というのが佐天の出した結論であった。初春も、このままでは御坂は結ばれない、という点はほぼ同意であったが、それ以上にある事を危惧していた。

「もし本当に告白されちゃったらどうするんですか、御坂さんはあの人を振ることになっちゃいますよー！」

「その時は、そのまま付き合っちゃえばいいじゃん。向こうは、こっちが振る目的でアプローチしてた事なんて知らないんだし。それに、御坂さんはいざ告白されたら絶対振る事なんて出来ないって！」

「あ、そうか…！で、でもそれ以上に心配なのが、告白させる事ができなかった時です。そうなったら、御坂さんはすごく落ち込むと思いますよ！」

「それは、わたしたちが関わらなくても同じじゃない？むしろ、このまま何も無く終わっちゃう方が後々よっぽど後悔するんじゃないかな」

思いの外真面目な表情で真面目に回答する佐天に少々面喰う初春。

「佐天さん、意外と真面目に考えてたんですね。てつきり面白半分な思い付きだったのかと…」

「当然じゃん！ま、面白半分てのは完全には否定できないけどね」

「佐天さんが御坂さんを思って言った事なのは分かりました。けど、やっぱり私には…」

「初春だって、あの二人の関係に興味あるんでしょ？」

「う…それはそうですけど…」

「それじゃあ決まり、これから張り切って御坂さんを応援していこう！」

まだまだ不安は拭い切れないものの、御坂のためを思っの計画で

ある事は理解でき、また御坂の恋愛について正直佐天以上に興味があったため、結局初春は合意してしまった。

「仕方ありません…でも、行き過ぎた事をしたらすぐに止めますからね」

「わかってるって。あと、この話は白井さんには内緒にしておいて方が良さそうだね。」

「そうですね。後で御坂さんにもそう伝えておきましょう」

この提案には初春も即座に合意した。こんな事が知れたら黒子は即座に取り乱し、計画に大きな支障が出る事が明らかであるからだ。

「それにしても御坂さん、意外とあっさりOK出したよね。合意を得るのにもう少し苦労すると思ってたんだけどなあ」

「そういえばそうですね。むしろ、食いついて来てたような気も…」

* * * * *

一方そのころ、一人帰り道を歩く御坂は…

「うう…あたしのバカ…」

20分程前の自分をひどく攻めていた。

『その人を御坂さんに惚れさせて、告白させてからわざと振るってのはどうですか!』

『え…ええええっ!!いいいやいや、いくらなんでもそれは…!』

『さつきム力つく奴だつて言つてましたよね、ならちようどいいじゃないですか!それとも御坂さん、やっぱりあの人のことが…!』

『そそそれは絶対に無い!いいわよやってあげようじゃない!!!』

つくづく自分は単純だと思つ御坂であつた。

「今から断ると更に大変そうだし、あの子達が満足する程度に付き合つてあげるしかないか…。それに、アイツを弄ぶのは面白いかもしれないしね」

あくまで後輩の遊びに付き合つてやるに過ぎない、と自分に強く言い聞かせ、覚悟を決める御坂であつた。

「けど、もしアイツが本当にわたしに惚れて告白してきたら…その時は…って、何考えてんのよわたしは!」

第3話：とある私服の大作戦（前書き）

H22年11月に文章を大幅改正しました。
話の内容も僅かに変わっています。

H23年4月23日、全体を僅かに改正。

《あらすじ》

佐天の口車に乗せられ、作戦を実行せざるを得なくなった御坂。
佐天と初春は一体どんな計画を思いつくのか？

第3話：とある私服の大作戦

佐天が思い付いた、とんでもない作戦に乗ってしまった翌日。先日と同じファミレスに向かう御坂の足取りは重かった。

* * * * *

- ファミレス店内 -

御坂は入店し、奥の方から手を振る佐天と初春の方へと向かう。

御坂「お待たせ」

佐天「こんにちは、御坂さん！」

初春「今日から頑張っていきましょう」

案の定、佐天と初春は元気一杯である。

御坂は嫌な予感を抑えつつ、今日の予定について問いかける。

御坂「で、例の計画だけど、もう何か作戦は考えてあるの？」

初春「それなんですけど…御坂さん、上条さんのケータイ番号とメールアドレスはもう知ってるんですよね」

御坂「うん、一応ね」

佐天「だったら話は早いですよ。かわいい服を来て、上条さんを呼び出すなんてどうです？」

初春「御坂さんはいつも制服だから、新鮮でいいと思います」

御坂「(げっ…)」

予想より遙かに踏み込んだ内容を示され、御坂は動揺を隠せなかった。

御坂「い…いや、うちの学校は外出時も制服じゃなきゃいけない規則があるから、それは…」

佐天「それなら私たちの寮の部屋を使って着替えればOKですよ」

御坂「う……で、でも残念だけど私、あんまり私服は持っていないのよね！」

初春「じゃあ、今から早速買いに行きませんか？」

御坂「ええ、今から!？」

佐天「善は急げですよ、さあさあ行きましょう!」

御坂の必死の抵抗も空しく、事はトントン拍子で進んで行く。

注文したドリンクバーもそこそこに店を出た3人は、近くのファッションビルに向かい出した。

* * * * *

・某ファッションビル・

「こ、これはちょっと私には合わないような…」

「何言ってるんですか、メチャクチャ似合ってますよ！」

「そうですね御坂さん！あ、これも可愛いかも！御坂さん、それが終わったらこれも着てみて下さい！」

「…初春、あんな事言っておきながらあんたノリノリじゃん」

「い、いやあアハハ…」

後輩二人がキヤーキヤー言いながら服をとつかえひつかえ持つてくる。

御坂はそれを言われるがままに試着し、それをまた後輩二人がキヤーキヤーと批評する。

そんな状況が何十分か続いていた。

昨日にも増してハイテンションな二人。

特に、昨日はこの作戦にやや消極的だった初春が今日は佐天以上に張り切っている。

これは、歯止めを掛ける役割を初春に期待していた御坂にとってはショックな事態であった。

「き、着てみたけど…」

「お、それが一番良いですね！それにしましょう…！」

* * * * *

初春の部屋で、2人の勧めで購入した服に着替える御坂

「御坂さん、ものすごくカワイイですよ！これなら成功間違いなしです！」

「ホントです御坂さん、例の人もきつと気に入ってくれますよ！」

「あの…二人ともさあ、いきなりここまでするのはちょっと急過ぎるというか…」

まだ踏ん切りが付いていない御坂はそう訴えるが…

「ここまで来て何言ってるんですか、もう呼び出しのメールも送ちやっていますよ。」

「そうですねよ、御坂さん。では上条さん呼び出した場所に向かいましょう！」

無駄な抵抗であった。

* * * * *

- 初春の部屋の近くの公園 -

御坂は集合場所の公園の入り口付近に、佐天と初春はそこから少し

離れた茂みの中にそれぞれ待機していた。

「うう、まさかイキナリこんな事になるなんて…」

心の準備もまともに出ていない状態で放り出された御坂は、不安で一杯になっていた。

会ったらどんな言葉を交わせばいいのか。その後、どこへ行けばいいのか。

それ以前に、アイツはオシャレした自分を可愛いと言ってくれるのか。

不安が不安を呼び、緊張が加速していく。

「お、落ち着け私！大体、鈍そうなアイツが服の事に気付く可能性なんてそう高くなさそうだし、期待しちゃダメだわ…」

予防線を張る事で心を落ち着かせようとする。

一方、茂みの中の佐天と初春は、

「（私は上条さんて人を実際見るのは初めてだから楽しみだなあ！）」

「（なんかこっちまで緊張してしまいますね）」

御坂の憂鬱など露知らずで、噂の男の登場を心待ちにしていた。

そして…

「！…来た…！」

御坂の鼓動が高鳴った

第4話：とある私服の大作戦 2（前書き）

《あらすじ》

佐天と初春が最初に考え出した計画は、私服で上条に会うというものの。
準備は整い、3人は上条の登場を待つ。

第4話：とある私服の大作戦 2

とある公園の出入り口。

上条は御坂を見つけ、駆け寄ってきた。

「！…来た…！」

ハリネズミのようなシルエットの少年が、御坂に歩み寄ってくる。佐天と初春は、それが噂のお相手である事を確信する。

『（あ、あれが上条さんか！思ってたより普通の人だね…）』

『（あまり特徴の無い人ですね。髪は目立ってますけど）』

「よおっす、ビリビリ。お前からメールで呼び出して来るなんて珍しいな」

「お、遅いわよアンタ！（コイツ、またビリビリって…あの子達が見てなかつたらブツ飛ばしてるとこよ！）」

「いや、まだ時間前だろ…。」

印象アップを狙ってるとは到底思えない態度の御坂に、二人は心の中でエールを念じる。

『（御坂さん、笑顔笑顔！顔が引きつってますよ〜！）』

『（電気が少し漏れちゃってますよ、抑えて下さい！てか、いきなりスゴいあだ名で呼ぶなあ…）』

「で、今日は一体何の用だ？てか、さっきから気になってたんだけど、今日のお前…」

「え！？なな、何よ…！」

『（おっ上条さん、御坂さんがいつもと違う事にもう気付いてたのかな！）』

『（だとすると、思ったより早いですね〜！噂に聞く程は鈍くないのかもしれない）』

「（コ、コイツがこんなに早く気付く訳ない、どうせまた何かの勘違いよー！）」「」

3人は上条のセリフに注目する。

「結構可愛いじゃん、その格好」

「いつ！？（うそ…コイツ、わたしを可愛いって…）」

『（し、しかもまだ御坂さんに追い打ちかけてますよ〜！）』

「そのカツコなら相手も惚れてくれんじゃないか？頑張…ってあれ御坂、何で固まってるんだ？」

「フフ…ハハハ……」

『あぁっ、御坂さんが上条さんに電撃を！！』

『御坂さん、落ち着いて下さい！あ、上条さん、逃げてっちゃった……』

『私たち、これから御坂さんのお役に立てるんですかね……』

初春の寮に戻った3人

「分かったでしょ、アイツがどういうヤツなのか！ほんっとムカつく〜！」

御坂は怒りながら着替えていた。

「ま、まあまあ御坂さん、可愛いって言うてもらえてたじゃないですか！」

「そ、そうですね、きつと好感度は上がったはずですよ」

二人は、自分達が考えた作戦が失敗に終わった事に責任を感じると同時に、これを機に御坂が作戦から降りてしまう事を危惧していた。しかし、必死になだめてはいるが御坂の怒りは冷める様子は無かった。

「よし、決めた！」

「(ま、マズいですってこの流れは!)」

「(うん、きつと辞めるって言い出すよね...)」

もうダメかと諦めかけた佐天と初春であったが、御坂の口から飛び出した言葉は予想と反対の内容であった。

「次こそは成功させてアイツを見返してやるんだから！」

「「えっ」「」

「あ、い、いやほら、負けっぱなしは悔しいじゃん、わたし勝負にこだわるとタイプだから、あはは...」

(...とりあえず続けてくれるみたいですね)

(...そうみたいだね、良かった良かった...)

「まったく、相変わらず突然怒り出すなあ...上条さんが何したって言

「うんですか」

呼び出されて行ったにも関わらず物の数十秒で追い返された上条。御坂(+2人)の計画など露知らず、ブツブツと文句を垂れながら歩いていた。

「…あれ、わざわざ呼び出して来たって事は、あの服はまさか、俺のために？」

「いや、アイツに限ってまさかな…」

御坂達の作戦成就はまだ遠い…

第4話・とある私服の大作戦 2 (後書き)

しばらくは、こんなパターンの話を量産していく予定です。

第5話：メーブル大作戦
(前書き)

前話から数日後

第5話：メール大作戦

あれから数日後、御坂に会うためにいつものレストランに向かう2人の姿があった。

佐天「いやあ、この前は参ったね。上条さんの鈍さが想像以上で」

初春「そうですね…」

佐天「既にメアドも交換済みの仲だし、ちょっと背中を押せば意外と楽勝かな。なんて思ってたけど、かなり甘かったかも…」

初春「御坂さん、続けてくれるかどうか心配ですね…。前は『次こそは』なんて言っていましたけど、本心ではどう思っているやら…」

佐天「もともと乗り気じゃなかったしね、『もうやめる』って言い出しても不思議じゃないか」

しかしレストランに入店した瞬間、出入り口付近の席に座っていた一人の人物に話しかけられ、二人の心配は杞憂となった。

御坂「遅いわよ、二人とも！」

佐天（もう来てる…ヤル気だよ…）

初春「やっぱり心配無かったみたいですね」

初春「今日は、恋愛について特集されてる雑誌を友達から借りて持って来ました」

佐天「おお、ナイス初春、どれどれ見せて!」

御坂「う、わたしこういうのあんまり見た事無いなあ」

佐天「あ、見て下さいよ、これなんか良いんじゃないですか?」

御坂「どれ?なにに、『恋愛の掟・序盤編、メールは毎日送りましょう』?え、毎日送るの!?!」

『まずはこまめに連絡を入れる事で、自分の存在を相手に認識させましょう』といったような事が書いてあった。

初春「いいですね。前회가ちょっと焦りすぎた部分もありますので、今回はこういった簡単な作戦が丁度いいかもしれません」

御坂「あ、あんまり簡単には思えないんだけど...」

佐天「毎日といってもメールですし、思ったほど難しい事じゃないですよ!」

御坂「うん...まあ今までもアイツには何回か送ってるし、出来なくは無いかも。わかった、やってみるわ!」

一週間後、再びレストランにて。

佐天「さて、あれから御坂さんうまくやったかな？」

初春「単純な作戦ですし、少しは進展があつた筈ですよ」

佐天「だよな。あ、御坂さんが来た！ あれ？なんか元気が無いよ
うな……」

初春「本当ですね。なにかあつたんでしょうか……」

御坂「二人ともおまたせ」

佐天「御坂さん、どうでしたか!？」

御坂「それが……一週間送り続けたけど、一通も帰って来ない……」

初春・佐天「「ええっ!？」」

佐天「い……一通も……ですか!？」

御坂「うん……」

予想外の展開に困惑し、思わず顔を見合わせる二人。

佐天「ちょ、ちょっと送ったメールの内容見せてもらってもいいですか？」

御坂「ええ！それは…」

初春「今後のためです、お願いします！」

御坂「わ、分かったわ…」

御坂は、初春に渋々ケータイを手渡す。

初春「では失礼します、どれどれ……………ヒイツ！」

水曜「あたしと勝負しなさい！」

木曜「聞いているの！？あたしと勝負しなさいよ！」

金曜「ちよつと無視してるんじゃないわよ！あたしと勝負し（略）」

火曜「あたしと勝（略）」

佐天「どうしたの初春！？私にもちよつと見せて…ってうわっ！な、なんですかコレ！」

御坂「え！？い、いや、アイツに今まで送ったメールもだいたいこんな感じだし、今回も今までの調子でつい…アハハハ…」

佐天 （初春、この人も想像以上だよ…）

初春 （佐天さん、私たちとんでもない事に首を突っ込んでしまいましたね…）

第5話：メール大作戦（後書き）

なんかちょっとキャラ弄り過ぎですかね…

第6話：メーブル大作戦 2（前書き）

5 / 29 誤字修正

第6話：メール大作戦 2

初春「み、御坂さん、これじゃあ返事が返って来ないのも当然ですよ…」

御坂「や、やつぱまずかったかな…」

初春「これ、ほとんど脅迫じゃないですか!」

佐天「深く考えず、普通の内容で送れば良いんですよ」

御坂「普通って言われてもさ、案外難しいのよね」

初春「今日の出来事とかを送ったり、逆に聞いたりするだけでも十分ですよ」

佐天「そうだ、今日最初に送るメールは私たちが作ってあげますよ!」

その晩、上条は部屋で頭を抱えていた。

「はあ、アイツは一体何考えてんだ、今度は物騒なメールを1週間も…不幸だ…」

脅迫染みたメールを1週間送り続けられた上条は戦々恐々とした日

々を送っていた。

メールで自分の存在を意識させる御坂達の目的は、ある意味達成されたと言える。

そして今日も、例の宛先からのメールが一件：

上条「うわっ言ってる傍から来やがった！どうせまた脅迫文のよう
な……え！？」

『こんばんわ〜¥（^^）

今日は良い天気だったね（太陽の絵文字）。

御坂は今日、おいしいクレープや見つけたんだ〜（ハートの絵文字）。

当麻は今日、何かいいことあった〜？』

上条「な、なんだ！？」

上条は一瞬目を疑った。

送られて来たのは、昨日までとは全く違う、絵文字を駆使したメール。

上条「なんか怖え…一件穏やかだけど、別の意味で殺気を感じる！」

突然の変化に驚く上条であったが、返信することにした。

上条「なんか返信しないと今度こそ殺されそうな気がする……」

同じ頃、御坂も部屋でケータイとにらめっこしていた。

「あの子達が作ってくれた文章で送信してみたけど、本当にあんなので返事来るのかな…」

直後、ディスプレイのメール受信の表示と共に、ケータイが震えだした。

「ひゃっ、返ってきた!？」

急いでそのメールの内容を確認する御坂。送り主は、紛れも無く上条当麻であった。

「ついにアイツから返ってきた…って、何でこんな事に感動してんのよわたしは!」

そう言いつて自分を戒めるが、御坂の口元は緩んでいた。

御坂「えーと、内容は…」

『今日、上条さんは自販機でお金を飲み込まれました』

御坂「ぷぷっ相変わらず今日もついてないのね〜」

そして、上条宅では。

上条「お、また来た。えーと、」

『あんた相変わらずね〜（カエルの絵文字）不幸うつさないでよ。わたしなんか昨日、お金を入れてないのに買えたわよ（カエルの絵文字）』

上条「オイ、いきなりキャラが戻ってるじゃねーか！さっきのは何だったんだよ！…てか、まだ自販機に電撃浴びせてんのかよアイツは！あと、なんでカエルの絵文字ばかり使ってるんだろ」

3日後、いつものファミレスにて。

「はあ、不安だなあ…今度こそちゃんとやってるかなあ、御坂さん」

「どうでしょうね、また落ち込んで現れなければ良いですが…」

初春と佐天は不安な面持ちで待機していた。

「ゴメン待った〜!？」

「!？」

「見て見て、アイツから返事がこんなに来ちゃったのよ!この前なんか一晩で5回も返信させちゃったし、昨日に至っては『お休み』なんて来ちゃ…!」

予想に反して超ハイテンションで現れた御坂。

ここまで一気にまくしたてたところで、ハツと我に帰る。

御坂「い、いやあくまで振るのが目的である事は忘れてないわよ!」

佐天・初春「はは…」

ひとまず、まともな進展があつた事に安堵する二人であつた。

上条「最近アイツが毎晩夜遅くまでメールしてくるから寝不足だ…」

『上条ちゃん、今日はあぐびぽっかりしてるから補修です』

第7話：メール大作戦 3（前書き）

《あらすじ》

ついに上条とのメールのやりとりに成功した御坂。

上機嫌でレストランに現れ、佐天と初春に戦果を報告していた。

第7話：メール大作戦 3

御坂「ところで初春さん、前見せてくれた雑誌、まだ持ってる？」

初春「あ、ハイありますよ」

御坂「見せて見せて！えーっと…あ、これは…」

『恋愛の掟・初級編 時には連絡を止め、相手を焦らすのも効果的です』

御坂「え！？送らないのが作戦になるの？」

佐天「心理戦ですよ、焦らされた相手はこちらの存在を更に気にかけるようになるんです」

初春「向こうからメールが来るようになりますよ」

御坂「そういえば、今までアイツから送られて来た事は無かったなあ…よし、今日から実行してみよう！」

そしていつもの帰り道…

「佐天さん、ああいった作戦はまだちょっと早かったんじゃないですか？」

「わたしもそれはわかってるよ。あの2人には心理戦は向かないって思うし」

「佐天さんもそう思ってたんですか？じゃあなんで…」

「あの御坂さんが初めて自分で決めた作戦だから、なんか断れなくてね」

「あ、そういえば御坂さんが作戦の考案に積極的になったのは今回が初めてでしたね」

「作戦自体は悪くはないし、もしダメだったら明日にでも止めればいい訳だし、まあ今回はこれで行ってみようよ」

そしてその晩…

pm 9:30

「はあ、今日は補習でクタクタだ、全くついてねえよ…」

寝不足の身体に追加授業で追い打ちをかけられ、上条の体力はゼロに近かった。

今日だけは早く寝て、体力の回復に専念する事にした。
マナーモードをサイレントに設定し、上条は寢床に着く。

「後で殺されるかもしれませんが、今日だけは…寝させてもらいます…ZZZZZZZZ」

pm10:00

御坂「ふっふっふ、今日は送りたい気持ちをグッと抑えて、アイツを焦らすわよ！」

雑誌の作戦通り、御坂はケータイに手を付けていなかった。

「アイツの動揺する顔が目には浮かぶわー!!」

pm11:00

「そろそろ焦ってるころよね」

am0:00

「…い、いまメール打ってるのかな」

am1:00

「…何で送って来ないのよアイツは」

ここで、御坂はある事実に気付く。

「…つか…わたしが焦らされてどうすんのよ！」

…バ、バカバカしい、もう寝よ…」

しかし『もしかしたら今からでも送られて来るかも…』といった期待を捨て切れず、なかなか寝付けない御坂であった。ようやく眠る事ができた頃には午前4時を回っていた。

am7:30

「ふあああ、久々によく眠れたあ〜！」

つと、そうだそうだメールを確認しないと…あれ、昨晩は1通も来てない？

なんだか知らんが助かった〜」

am8:10

「…うん、何よ黒子…って、もうこんな時間！？やば、急がないと遅刻！」

pm4:00 ファミレスにて

「（御坂さん、目にクマできてるよ…）」

「（昨晩どんな様子だったのかが目に浮かびます…）」

「うう、結局アイツからメール来なかった…」

「み、御坂さん、この作戦は止めておきましょうか！」

「そ…そうしましょう！鈍い相手には通じにくいんですよきつと！」

『たった一日で判断する作戦では無い、2〜3日続けないと』、と忠告したかった佐天と初春だが、こんな事を何日も続けさせたら御坂が睡眠不足になりかねないと判断し、中止しておいた。

第8話：とある突然の単独作戦（前書き）

前作終了から2日後、焦らし開始から3日後の話です。

第8話：とある突然の単独作戦

「ふああ…。う…ん、眠…」

起床時間となり目覚めた御坂は、どう見ても睡眠時間が足りていない様子であった。

それもそのはず、昨晚に御坂が眠る事ができたのは、午前3時を回った頃なのだ。

しかも、こんな夜がもう三日も続いているのである。

原因は、三日前より実行中のある作戦にあった。それは、毎日続いていたメールを突然絶ち、相手を焦らすという物。この相手を弄ぶかのような内容がプライドの高い御坂の心をくすぐり、一日試してみたものの特に戦果は得られず、後輩達にはここで止めておくよう進言された。

しかし失敗したまま終わらせるのはプライドが許さず、後輩の忠告も無視してこの作戦を更に二日続けてみたのだった。だが、それでも上条は期待していたような反応を全く起こしてくれなかった。この作戦の効果を過剰に期待していた御坂は、上条からのメールを深夜まで待ってしまい、計三日間なかなか寝付く事が出来なかったのだ。焦らすつもりが、焦らされるだけで終わってしまった…。

「今日も来てないか…」

ここ最近に定番の行動となった、起床後のメール確認。今日も送られて来ていない事を確認し、御坂は盛大な溜め息を付く。そして急いで身支度を整え、学校へと向かった。

その学校でも御坂は覇気が無く、授業中も上の空、休み時間もボーっとしているだけといった具合である。原因はやはり連日の睡眠不足、そして例の作戦の失敗が大きいのであるが、御坂とてそれだけでここまで落ち込んでいたわけではない。この三日間の作戦実行の過程で気付いてしまったある『事実』が、決定的な要因となっていたのだ。

そしてその事実とは、

『メアドを交換後、アイツの方からメールを送って来た回数ほぼゼロである』
という事であった。

「アイツ、わたしに興味無いのかな…」

思い返してみると、アイツがメールを送ってくるのはいつも、こちらが送った時だけ。いわゆる返信だけであった。近付いていたようで、そうではなかった上条との距離に気付かされた。たった数日メールをやり取りしただけで舞い上がり、ちよつとした恋人気分さえ味わったつもりでいた自分が情けなかった。

そんな事を思っているうちに、授業の終わりを告げるチャイムが響き渡る。ほぼ一日中上の空で授業を受けていた御坂であったが、ころづじてノートはとっており、また普段の行いが良い事もあってか教師に咎められる事も無く、授業の全課程を無事終えていた。

御坂は肩を落とすとロボと帰り道を歩いていた。今日はこの後、初春・佐天と待ち合わせの予定は無い。こんな時こそ後輩たちに愚痴を聞いてもらい、次の作戦を練ってもらいたかったが、生憎ここ数日は二人とも予定があるとの事。よって、次に実行予定の計画も今は無い。作戦の事は忘れて黒子を誘おうとも思ったが、今日は風紀委員の活動で忙しいらしい。そんなこんなで、今日の放課後は完全に手持無沙汰となってしまうていた。

「はあ、する事無いし、コンビニで立ち読みでもするかな」

などと、お嬢様学校の生徒らしからぬ事を考えて始めた矢先、聞き覚えのある声が御坂の耳に響いた。

「よっ、ビリビリー！」

「っ!？」

背後から突然呼びかけてきたのは、ここ最近頭から離れない男であった(御坂に自覚は無い)。いつもなら、ビリビリ言うなあ!と突っ込んでいる場面であるが、今回は完全に不意を突かれ、それすら出来ない程に動揺していた。

「何驚いてんだ、俺に呼ばれて驚くようなキャラだったか？」

「お、驚いてなんか…!」

強がるものの、動揺は一向に収まらない。仮にも『告白させようとしている相手』が現れたのだから、当然と言えば当然である。この場を誤魔化すために、いつものように『勝負よ!』と言いかけたが、この言葉は後輩達に止められていた事を思い出し、寸でのごころで踏み止まる。踏み止まったはいいが、代わりの言葉は出てこな

第8話：とある突然の単独作戦（後書き）

更新が少々遅れて申し訳ありません。

久々に文章中心セリフ少なめに見てみたところ、初のスランプに…

あと、御坂さんをいつも有り得ない事で悩ませちゃってゴメンなさい
い^^;

第9話：とある突然の単独作戦 2（前書き）

《あらすじ》

街で上条に突然呼び止められた御坂。

何の準備も無い状態で行動を共にする事となった。

第9話：とある突然の単独作戦 2

「いやあ、今朝知らない店のチラシが入ってきて、安かったからつい勢いで来ちゃったけど、肝心な場所を知らなくてさあ」

「…へえ〜」

「えっと…タイムセールも諦め掛けてたところだったし、ホント助かったよ、ハハ…」

「…そ、そうなんだ〜…」

二人は目的地であるスーパーに向かって、会話を交えながら歩いていた。男女が並んで道を歩く…通常なら、恋人と見られてもおかしく光景である。しかし、この二人の様子を見て二人が恋人だと思つた通行人は誰一人としていなかった。何故なら、二人の会話はお世辞にも弾んでいるとは言えず、非常に暗い雰囲気は雰囲気醸し出していたからである。

（な…なんだこの空気の重さは…！やっぱ俺の用事なんかにつき合わされて怒ってるのか…？）

上条は焦っていた。さっきから話しかけても御坂はそっけない返答ばかりで、そればかりか目もまともにも合わせてくれない。鈍感な上条でさえすぐに気付く程のテンションが低さであった。前のように常にぶっきらぼうでケンカ腰なのも勘弁であるが、今の御坂の拒絶するかのような態度はそれ以上に堪えた。

（やっぱコイツは上条さんのことが嫌いなんでせうか…）

（何やってんのよわたし、こんなんじゃ嫌われちゃうじゃない…！）

一方、御坂は御坂でどうにか会話を盛り上げようと必死に打開策を考えてはいた。

しかし、一度混乱した頭は容易には正常な状態に戻らず、それどころか意識すればするほどに悪化していく。

何も口に出す事が出来ず、更に緊張のあまりまともに目を見れなかった。

「おお着いた着いた、ここだったのか！ありがとな御坂！」

そうこうしているうちに、目的地のスーパーに到着する。そこは、メインストリートからやや離れた場所にあるにも関わらず、店内は外から見ても中々の盛況振りであり、セールには大いに期待できそうだった。

「じゃあ俺はこれから買い物していくから…また今度な！」

『嫌われている』と思い込んだ上条は、これ以上自分の用に付き合わせるのはい悪いと思い、御坂に礼を言うと早々に別れを告げた。本当は、まだ御坂に手伝って貰いたい事が残っていたのだが。

「あ…えと…」

しかし『嫌われたかも』と思い込んだ御坂は逆に、ここで引き下がるのは非常にマズいと感じ取っていた。

この三日間の作戦で、自分と上条との距離が思っていたより遙か

に遠かった事を思い知らされた。

そして、今日このまま別れたら悪い印象のまま終わってしまい、ただでさえ近くない距離は更に離れてしまう。

そうなれば、今後の作戦に支障が出る事は必至、後輩にも合わせる顔が無い。

それより何より、これ以上アイツと距離が離れるのは…嫌われるのは絶対嫌…！

危機感に突き動かされた御坂は残った勇気を奮い立たせ、必死に言葉を絞り出した。

「ね、ねえ…！」

「ん？」

「か、かか…買い物まで、付き合ってあげるわよ…！」

「…え！？」

予想外な言葉に、一瞬固まる上条。

「ほ…ホラ、さっきのチラシに1人1パックまでつてやつ載ってたじゃない、あれ買うんでしょ？だからわたしが一緒に並んで倍帰買えるじゃん、はは…！」

考える余裕など無かった。御坂は、買い物まで付いていく理由を思いつくままに並び立てていく。

「…いいのか？そこまで付き合わせちゃって」

「と、当然でしょ！ホラさっさと行かないと売り切れちゃうわよ！」

「お、おい待てよ！」

相手の返答を確認するより先に、さっさと入店していく御坂。

相変わらずよく分からない奴だな…と思う上条であったが、御坂が徐々にいつもの調子に戻って来た事に安堵していた。

嫌われたと思っただけに、買い物に付いて来ると言い出した時は正直戸惑った。ただ、悪い気は全く無く、むしろ嬉しかった。理由は2つ、1つ目は卵が2パック買えるから。そして2つ目は、嫌われている訳ではないらしい事が分かったから。後者は上条の無意識な感情であり、本人には自覚は無かったが…。

そんなこんなで、上条も御坂を追う形でスーパーに入って行った。

そして二人は、『お1人様1個まで』の商品を、次々と2人分購入していく。

二人で同じ商品を手に取り、一緒に列に並ぶ姿は、今度こそ恋人そのものであった。

第9話：とある突然の単独作戦 2（後書き）

オチ？何それ。

御坂さん、いつまでも同じ事で落ち込ませてスミマセン。

小説を書き始めてから大きな目標としてきた、総合評価100ptに到達しました！

少なくともこの小説がそれを達成するとは思ってなかったので、本当に嬉しいです。

お気に入り登録して頂いた方、そして評価を付けて頂けた方、本当にありがとうございます！

そしてどうか最後まで宜しくお願いします。

第10話…とある突然の単独作戦 3 (前書き)

《あらすじ》

意を決して、上条とスーパーに入って行った御坂。
買い物を終え、その帰り道…

第10話：とある突然の単独作戦 3

「アンタ、ずいぶんたくさん買ったわね」

「おかげ様でな。おまえのおかげで今日は大漁だったよ」

あれから30分程が経過した頃、両手に大きなビニール袋を下げた上条と、横を歩く御坂の姿があった。タイムセールに間に合い、加えて数量限定の品も二人分買う事ができ、これ以上ない収穫を得た上条はホクホク顔であったが、ある事が気にかかってもいた。

「なあ、御坂」

「ん？なに？」

「お前なんか悩みでもあるのか？」

「へ？な、何よ突然！」

「いや…ほら、ここに来る途中、お前元気無かったじゃん」

「…！」

「何かあるなら、相談に乗るぞ」

上条から口から出てきた突然の気遣いの言葉に驚く御坂。

（コイツがわたしを気遣ってくれてる…）

何だが嬉しかった。しかし…

（いや待てよ…）

御坂はある事に気付いてしまった。

（よく考えてみたら…わたしが落ち込んだ原因はコイツじゃない！）

「そもそも、アンタが…！」

「へ？」

「い、いやその…」

アンタがメールをよこさなかったから落ち込んだのよ！と言いいかけていた御坂。

危うくもう少しでの作戦を自らバラしてしまうところであった。

「べ、別に何でもないわよ…特に悩みも無いわ」

「？」

最初の質問にさえ答えて貰えていない上条だが、また不機嫌になりかねないと感じ取り、それ以上深入りすることはしなかった。

そのまましばらく歩いて二人だが、御坂がある事に気づき、上条に話しかけた。

「そう言えばアンタ牛乳とか買ってたけど、家が遠いのに大丈夫なの？」

「あ、やべ、言われてみれば！」

上条の部屋はここからやや距離があり、このまま歩いて帰ったらいくつか買い込んだ要低温保蔵の乳製品がピンチになる事が予想された。

「アンタ、少しは考えて買いなさいよね」

「いや〜安かったからつい…悪い御坂、先に行くわ！あと、今日の礼は必ずするから！」

「え？い、いいわよ、そんなの…！」

しかし、駆け足で行ってしまった上条に、御坂の最後の言葉は届いていなかった。

自分の言葉が原因であるとはいえ突然行ってしまった上条に、苦笑いを浮かべていた。

「…とりあえず、次があるって事よね…」

そしてその夜、御坂は今日の出来事を思い返していた。

「一緒に買い物…まるで恋人みたいだったかも…ウへへ」

色々あった一日の中から良い出来事だけを都合よく思い出し、悦に浸る御坂。

目と口を思い切り緩め、軽くマンガ涎を垂らすその姿はとても上条に見せられた物ではなかった。

「いやいや何考えてんのよわたしは！」

ハッと我に返り、真っ赤な顔を左右にブンブン振りながら、自分の感情を否定する。あくまでアイツを振る作戦のために取った行動であり、今日は前回の失敗分を取り戻したまでよ！…と、すっかりテンプレとなった言い訳で自分を戒めた。

「そう、アイツはメールもくれないし…今日会ったのも単なる偶然…この前だって…ホント鈍いし…」

戒めの勢い余ってトラウマモードに入ってしまった御坂は布団に潜りブツブツと呟き始める。

「はあ…、今日はもう寝よ…」

ここ数日まともに眠れていなかったため、今日は早く寝る事にした。間もなくして襲ってきた激しい睡魔に身を委ね、寝息を立てる御坂。

「お姉様、ケータイが鳴ってますわよ！」

「ZZZZ…」

第10話：とある突然の単独作戦 3（後書き）

いつも、後編が一番締められません。今回文章がヤバいかも…

とりあえず、10話連載達成でしたが、執筆ペースは日に日に
下降中。

長期連載をこなす方々の凄さを肌で感じています。

第11話：とある久々の作戦会議（前書き）

上条とスーパーに行った次の日の話です。

第11話：とある久々の作戦会議

ここは第七学区内に店舗を構えるレストラン。

御坂、初春、佐天の3人は今日もここに集合していた。

御坂「二人ともおまたせ！三日振りになるわね」

初春「こんにちは御坂さん。たった三日なのに久し振りに感じますね」

佐天「最近たくさん会ってますからね、私たち！」

3人は2週間ほど前から頻繁に来店するようになっていた。その理由は、2週間ほど前からスタートさせたとある作戦の計画を練るためである。そしてその計画とは、「上条に積極的にアプローチして御坂に惚れさせ、告白してきた所を振る」というもの。上条と御坂の距離は放っておいたら縮まりそうにないと判断した佐天が、二人を結ぶために提案した作戦である。ちなみに、御坂はまだ振るための計画だと本気で思っている。

佐天「さあ、今回もラブラブになる作戦をガンガンと練っちゃいましょうか！」

初春「前は新しい作戦を考えずに終わってしまいましたからね」

そしていつものように初春と佐天が主導で話が進むに思えたが…

御坂「あ、それなんだけど、昨日ね…」

口では謙遜気味だが、まんざらでも無い様子の御坂。

御坂「それでね、実はまだ報告する事があるのよ！」

初・佐「ええっ！？何ですか何ですか？」

御坂「ジャーン！今朝起きたら、こんなのが…！」

ケータイを取り出し、嬉しそうに画面を見せる御坂。

佐天「こ、これは…！」

初春「上条さんからのメール…ですか！？」

御坂「えへへ、当ったり！」

ケータイから表示されていたのは、上条から送られて来たメールであつた。

『上条さんは昨日のお礼に何か奢らせて貰いたいので、ヒマができたら連絡下さい』

といった内容が綴られていた

初春「ス、スゴい…スゴ過ぎです御坂さん…！」

佐天「御坂さん、いったいどんなスーパーテクを…！」

次々と明らかになつていく御坂の手柄の前に二人は感動すら覚えていた。が…

「でしょでしょ？ついにアイツ『送ってきたのよ！』」

「…え？」「」

二人が驚いていたのはメールの内容の方であったが、御坂はややズレたポイントを強調してきた。

御坂「これで、前回の作戦の雪辱は果たされたわ！」

初春「は、はは……」

佐天「す、スゴいです……」

(まだ気にしてたんだ……)

佐天「そ、それよりそのメール、何気にスゴい事書いてありませんでした？」

御坂「え？そう？」

初春「よく読んでみて下さい！」

言われて御坂は、メールを確認する。

(ん？奢ってもらえる……って、もしかして……)

「……誘われてる？」

こくんと頷く後輩二人。

「……えええっ!？」

奢られるいう事は当然、上条に会う事になる。さっきのメールは、『会おう』と言われているに等しかった。少し考えれば分かる事であったが、メールが送られて来た事ばかりにが意識が行っていた御坂はそんな事にも気付いていなかった。

御坂（アイツから…私を…）

メールの本当の意味を知り、驚きと嬉しさと照れが入り混じって混乱状態になっていた御坂だが、同時に『しまった！』とも思っていた。そんな内容のメールをこの二人に見せたら、必ず『今日明日に会え』と行って来るに違いないからだ。

初春「それで、もう返信はしたんですか？」

御坂「いや、それがまだ…メールに気付いたのは今朝だったからね」

佐天「だったら、明日にでも奢ってもらっちゃいましょうよ！」

予感的中した。

（や、やっぱりそう来たか…）

御坂「明日って言ったって、行く場所とか決めてないし、昨日も会ったばかり…」

初春「ああ、連続のデートで二人に何が起こるのでしょうか…！」

佐天「場所なんて向こうが決めてくれると思いますよ。てなわけで早速、明日が空いてるって送っちゃいましょう！」

別の世界へ行ってしまい、妄想に浸る初春。予想通り、とにかく早く会わせようとする佐天。

こうなると、もう二人は止まらなかった。

結局、御坂は明日の放課後に上条に会う事になってしまった。

「あの二人、実は面白半分で作ってるんじゃないかしら…」

いつも計画的なのかそれとも勢いで決めているだけなのかイマイチ分からない二人にやや不信感も湧かないでもなかったが…

「ま、いつか…やってやろうじゃない！」

今回は不思議とヤル気の方が上回っていた。

その理由は二つ。

一つは、先日の単独での行動が成功したことで、自信が付いていたから。

（昨日だって一緒に買い物まで行けたんだから、明日だってきっと大丈夫…！）

そしてもう一つは、上条に早く会いたい、という気持ちが更に強まってきたから。

もちろん御坂に自覚は無い。

「明日も頑張るぞ〜！…もちろん振るために！」

第11話：とある久々の作戦会議（後書き）

日に日に更新ペースが遅くなって申し訳ありません…。

第12話：とあるカップル？

「よう、待ったか？」

「ううん、私も今来たところよ」

翌日、御坂は予定通り上条と出会っていた。

今回の待ち合わせは第七学区の繁華街であった。

そして、この二人を後方から見守る二つの影。

「おお、今日の御坂さんは良い感じに落ち着いているように思われますが、いかがでしょうか初春さん！」

「そうですねえ、まずは良い滑り出しですね…って、私達は解説者ですか！」

今回は参謀役の二人もこっそり同行していた。

「んで、何か食べたい物はあるか？」

「いや、特に無いけど…てか、そっちで決めてないの？」

奢ると言っておきながら行き場所を決めていない上条に少々落胆する御坂であったが、同時に先日初春と佐天の言葉を思い出していた。

『もしも上条さんが行くところを決めて無かった時は、カフェという喫茶店で奢ってもらうのがオススメですよ。あそこで好きな人に奢って貰うと、その人から告白されるって噂で有名なんです』

！」

『ええっ！ほほんどに！？』

『初春、それってただの都市伝説でしょ…御坂さんも信じ過ぎですよ！まあ確かにオシヤレな喫茶店ですけどね』

「（ちょうどいいわ、初春さんが言ってたところに行くか…）仕方ないわね、それじゃあ…」

カフェに行こう、と言いかけた御坂の口が止まった。

向かいにある看板が御坂の目に飛び込んできたからである。

『お買い上げのお客様に、ゲコ太ストラッププレゼント！先着××名まで』

そしてその看板は、向かいのたこ焼き屋のものであった。

「…たこ焼きでも奢ってもらおうかしら！」

「「！？」」

御坂のまさかの言葉に絶句する初春と佐天。

そして二人は、更に驚きの光景を目の当たりにすることとなる。

「え！？別にいいけど何でまた突然…」

「いいからほら、早く早く！」

「お、おい！」

何と御坂は、上条の手を取ってたこ焼き屋に向かって走り出したの

だ。

僅か10秒足らずのうちに繰り広げられた予想外の展開に、二人はしばらく言葉を失っていた。

「…ど、どうなってるんですか…?」

「…さ、さあ…」

数分後、近くの公園のベンチに並んで腰かけ、たこ焼きを頬張る二人の姿があった。

たこ焼きと一緒に缶ジュースも飲んでいたが、これは御坂の奢りであった。ちゃんと自販機にお金を入れて買ったものだ。

「しっかし、お前ホントにそのカエルのキャラが好きなの…」

数分前に、たこ焼き屋で店員から差し出されたストラップを、目を輝かせながら受け取った御坂。

その様子を見た上条は、ようやく御坂が突然たこ焼きを選んだ理由を理解したのだった。

「ち、違っわよ!?! たこ焼きが食べたかっただけで、これは偶然付いて来ただけなの!」

「へえへえそうですか」

取って付けたような御坂の言い訳を上条は軽く流す。

「（はあ、ゲコ太を見るとつい理性が…）」

恋の進展よりも自分の趣味を優先してしまった事を御坂は多少後悔していた。しかし、ゲコ太ストラップを手に入れた事、そして上条に約束通り奢ってもらえた事の嬉しさの方が大きく勝っており、上機嫌であった。そして、二人で並んで食べるたこ焼きの味は格別であった。

「（このシチュエーション、恋人に見えなくもない、よね…）」

一方初春と佐天は、公園の茂みから頭だけ出した状態で隠れ、二人の様子を窺っていた。

「はあ、私の提案はストラップに負けてしまったんですね…」

「ま、まあまあ…」

計画を反故にされ落ち込む初春を佐天が宥めていた。

「結局あの二人、何だかんだで良い雰囲気になってるじゃん」

「本当です、傍から見れば立派なカップルですね！」

二人から見ると、ベンチで仲良かったこ焼きを食べる上条と御坂はどう見ても恋人同士であり、特に御坂からは幸せオーラが二人にヒシヒシと伝わって来た。もつとも、そのオーラの40%程は、ゲコ太ストラップを手に入れた事による嬉しさで出来ていたが。

「ところで、さっきのあれは驚きでしたね、まさか御坂さんの方から手を繋ぐとは……」

「うんうん、しかもなんか物凄くナチュラルに手を取ってたよね！」

『さっきのあれ』とは、先ほどたこ焼き屋に向かった時に、御坂が上条の手を取ったシーンの事。

二人にとって衝撃的であったこの出来事に話題が移るかと思われた矢先、佐天が御坂の異変に気付いた。

「…あれ？」

「どうしたんですか？」

「御坂さんの様子が……」

「む……ぐ……！」

御坂は喉にたこ焼きを詰まらせたらしく、苦しそうに胸を叩いていた。

二人はそれを見てガクツと肩を落とした。

「あちゃ、良い雰囲気だったのに！ やっぱこついつところは御坂さんだなあ……」

「何か、私たちの御坂さんが帰ってきてくれたようでホツとしました……」

呑気な事を言っている後輩達とは対称的に、上条は御坂を気遣う。

「おいおい、大丈夫か？ 飲み物は、と……」

御坂の缶ジュースは既に空になっていた。それを確認した上条は、自分の飲みかけの飲み物を御坂に差し出した。

「まったくしょうがねえな、ほれ」

「むぐ!？」

御坂はひったくするように缶を受け取り、一気に流し込む。

「ぶはっ、ありがと…」

「まったく、もつとゆっくり食べるよな」

とんだお嬢様だな、と苦笑いする上条。

そして、その様子を一部始終見ていた初春と佐天。

「今の、あれでしたね…」

「うん、あれだったよね…」

二人は顔を赤くしながら目を合わせ、声を揃えて一つの単語を口にした。

「「間接キス……」」

第13話…とある黒い影…

翌日、いつもの喫茶点にて、いつもの面子が集合し、いつもの話題で盛り上がっていた。

「初春さん、昨日はその、ホントごめんね…」

御坂の口から最初に出てきたのは、初春が勧めてくれた喫茶店を口クでもない理由で行かず終いにしてしまった事への謝罪の言葉であった。

しかし

「何言ってるんですか御坂さん、そんな事より昨日はラブラブだったじゃないですか！」

「へ？」

初春からは、そんな事は気にしている様子は全く感じられなかった。そして、昨日の事を興奮した様子で佐天と共に話し出したのだ。

「らぶらぶ…だったっけ？」

佐天「上条さんと手を繋いでましたよね！」

「…え？」

初春「それに間接キスマでした！」

「ええええ！？」

どちらの出来事も、御坂の記憶に無かった。

「（手を繋ぐ…？間接キス…？）」

頭を抱えて固まる御坂。

その様子を見て、佐天が心配そうに話し掛けた。

「あの…もしかして覚えが無いんですか？」

「その…私、いつそんな事したっけ…」

「手を繋いだのは、たこ焼き屋に向かう時…」

「そして、間接キスは、たこ焼きを喉に詰まらせて飲み物を貰った時ですけど…」

「あ…」

残った記憶を絞り出し、ようやくその瞬間を思い出した御坂。

たこ焼き屋に向かう時、確かに自分は上条の手を取った。その時の指の感触が、微かに甦った。

喉に詰まらせた時、確かに上条が口を付けた飲み口に自分も付けた。唇の感触も（以下規制）。

恥ずかしい出来事を2つ同時に思い出した御坂。

恋愛レベル0の脳がこの事態に耐えられる筈も無く…御坂は御坂は放心状態に陥ってしまった。

「ふにゃ…」

「み、御坂さん！？うわっ、電気が漏れてる!？」

「御坂さん、落ち着いて下さい!！」

御坂が正気を取り戻すまでに10分もの時間を要した。

そして10分後。なんとか正気を取り戻した御坂は、後輩達と雑談を始めていた。

「二人とも、もう恋人みたいですよ！羨まひいでふ〜…」
顔が隠れる程の特大パフェを貪りながら話す初春。

「もう明日にでも告白されちゃうんじゃないですか〜!?!」
3杯目のドリンクバーを飲みながら、軽いノリで御坂をからかう佐天。

「ええっ！そそ、それは無い、それは！」
赤くなつて否定しつつも、まんざらでは無さそうな御坂。

「うふふ、お姉様ったら照れてしまわれて、真っ赤ですわよ」
ちゃちゃを入れる黒子。

しばらく4人はおしゃべりに夢中になっていた。

しかしある瞬間、そのうちの3人はほぼ同時に違和感に気付いた

「……ん?」「」

3人同時に、その方向に顔を向ける。

「……!」「」

そして、3人同時にある人物を認識した。

そこには、ここに居る筈の無い、というより最も居てはいけない人物が平然と座っていたのであった。

御坂「く……く……黒子っ!!???」

初春・佐天「ししししし白井さん!!???」

3人はガタっ!と後ずさりながら、思わず大声でその人物の名前を叫んでいた。

白井黒子。

常盤台に通う中学1年生、そしてレベル4の空間移動の能力者。

御坂とは同じ部屋で暮らす仲であり、また初春とは風紀委員の同僚かつ、昔からの親友である。

このように、この3人と親交の深い彼女が何故、このストーリーに全く関わってこなかったのか。

それは、彼女が御坂美琴大好きっ子であるからに他ならなかった。

黒子は御坂に対して明らかに一線を越えた好意を持っており、そんな彼女にとって上条は恋敵(?)とも言える存在。そして、現在3人が実行中の作戦は、御坂と上条を結ぶ事が目的。こんな事を黒子が知ったら不快感を示されるであろう事は火を見るより明らかであった。よって3人は、黒子には絶対知られないように、極力注意を払って事を進めてきたのだ。

しかしどこを嗅ぎ付けられたのか、この作戦は黒子に知られてしまった訳で…

開始以来最大の修羅場を迎えたと言えるだろう。

舞台は、喫茶店で3人が黒子の存在に気付いた瞬間に戻る。

「あらあら、3人ともようやくわたくしの存在にお気づきになられたんですか？」

「あ、アンタいつからここに…！」

「先ほどから、とても申しておきますわ。ところで皆様…お姉さまと例の殿方を相思相愛の関係になさる計画はご順調ですか？」

「……ギクッ！」「」

既に作戦内容はバレているようであった。脂汗を流す3人。

「ししし白井さん、これは決して御坂さんと上条さんを結ぶ作戦じゃないんですよ〜!」

「そそそう、これは振るためなんですよ振るため!要は御坂さんと上条さんを引き離す事が狙いなので…」

「おや、そうなんですか?それは素晴らしいプランですわ!」

黒子が思いの外すんなり事情を飲み込んでくれた事に若干安堵する初春と佐天。

しかし、それも束の間であった。

「そのような計画ですのなら、この私も協力させて頂きますわ」

「「「え?」「」」

マジですか…といった具合の表情で固まりながら、片頬を引きつける佐天。

この展開を若干読めていたようで、やっぱり…といった表情をため息交じりに見せる初春。

御坂に至っては半ギレ状態で黒子に突っかかっていた。

「ちょっとアンタ、一体何企んでんのよ!」

「何って…お姉様こそ、私が協力する事に何か不都合な点でも御座いますか?」

「はっ!まさかお姉様…あの殿方と本気でお付き合いなさるおつもりですか!?!」

「っ…！そ、そんな訳ないでしょ！あくまでアイツを振るためにや
つてんのよ、振るために！」

「ですわよね。ご安心下さいまし、私、決してお姉さまに悪いよ
うにはいたしませんわ！」

「くっ…」

初春・佐天「…」

最悪の不安要因にうまく付け込まれてしまった3人。
黒子の満面の笑顔の裏に、どす黒い物を感じざるを得なかった。

第13話…とある黒い影…（後書き）

黒子さんにマッネリ展開を救ってもらいます

第14話…とある黒い影…2

黒子が突然参戦した日の夜。

御坂と白井は寮にて、就寝時間を迎えようとしていた。

「あんだ…いつから気付いていたのよ」

パジャマ姿でベッドに腰掛け、黒子に尋問する御坂。後輩達と行ってきた事が白井にどこまで知られているのか、そして白井が何を狙っているのかを聞き出そうとしていた。ただ、隠し事をしてきた事による後ろめたさがあつてか、あまり強気にはなれなかった。本当なら、電撃を浴びせて無理やり聞きだしたいところであるが…

対して白井は落ち着いており、濡れた髪をブラシでとかしながら淡々と返答する。

「そうですねえ…確か、お姉様が上条さんと本格的にメールのやり取りを始められた頃でしょうか」

「そ、そんなに前から…！」

思った以上に早く感付かれていた事に、御坂は驚きを隠せなかった。

完璧に隠していたつもりだったのに、何で…。

もしかコイツは自分のケータイを盗み見たのではないか。

以前下着を盗んだ前科があるし、そのくらいはやりかねない…

そんな御坂の勘繰りを見透かすように、白井は口を開く。

「あらお姉様、もしや私がお姉様のケータイを覗いたなどと疑われて?」

「う…じゃ、じゃあなんで気付いたのよ!」

(…逆に、あれで気付かない方が難しいですわ…)

白井は心の中で溜め息をついていた。

はつきり言って御坂の異変に気付くのは非常に容易であった。ある日から突然夜中までケータイと睨めっこし、毎朝寝不足気味の顔で起きてくる。そして、日中はお決まりの放心状態。ケータイを覗く事などせずとも、メールの相手や内容は察する事ができた。

だが、今この場面でこの事を口に出すと御坂が興奮してしまい、収集が付かなくなる事は目に見えていたため、黒子はあえて話題を逸らす事を選んだ。

「お姉様!」

御坂の目を真っ直ぐに見つながら、強い口調で語りかける。御坂の肩がビクツと僅かながら反応した。

「な、何よ…!」

「改めて問いますが、お姉さまは何を目的にあの二人が考えた計画

を実行なさっているのですか？」

「な、何って…」

御坂が動揺した事を確認した白井は、更に畳み掛ける。

「やはりお姉さまは上条さんとお付き合いなさるために…!？」

「だ、だから違っつて言ってるでしょ！アイツを振るためよ振るため！」

「ではお姉様、間違っても最後に心変わりなさらぬようお願いいたしますわ」

「こ、心変わり…?」

「上条さんに愛の告白をお受けになられたあと」このまま付き合い合っ
ちやえ」だとか…」

「なな無い無い、絶対無い!」

「それを聞いて安心しましたわ。それならば私も心置きなくお姉様
にご協力できますの」

ここで消灯時刻を迎え、二人は寢床に着く。

↳ 2時間後。

御坂は、まだ眠りについていなかった。

『お姉さまは何を目的に…』

頭の中で後輩の言葉がリピートされ、御坂を責め立てていた。

ここ数週、頑張つてアイツにアプローチしているのは、付き合うためではなく振る事が目的。

別にこの事を忘れていた訳じゃなかった。

そして今日、黒子から2回ほど聞かれた。何を目的にアプローチしているのかと。

2回とも『アイツを振るため』と答えた。事実を言ったただけだし、特に問題は無い筈だった。

なのに、自分が言った『振る』の言葉に反応し、胸が苦しくなっていた。2回とも。

ホントにアイツを振る勇氣があるのか…と問い質されたような気分だった。

眠りにつけたのは、それから2時間後であった

そして翌日。風紀委員支部のとある部屋にて、白井と初春とが御対面していた。

「白井さん、私たちが御坂さんを手伝っている事にいつから気付いてたんですか？」

パソコンのキーボードを叩きながら白井に質問する初春。

質問に対し白井は、手伝う？たぶらかすの間違いでしょう！と毒づいたが、心の中だけに留めておいた。

「お姉さまがメールに御熱心になられてた時からですわよ」

「ま、まさか白井さん、御坂さんのケータイを覗いたんですか！？それはジャツジメントとして、いや人として…って、いたたた、何ひゆるんでひゆか！」

デジャヴを感じた黒子は、冷たい目付きをしながら初春の頬をつねっていた。同じパターンで2度も疑われるのは流石に気に障ったらしい。

「お姉さまは能力はレベル5でも恋愛に関してはレベル0、そんな方の異変に気付けない程、私は鈍くはありませんわよ」

「何微妙に上手い事言ってるんですか…」

初春の突っ込みを無視して、白井は話の核心に迫っていく。

「初春。あなたが企んでいる例の件ですが…お姉様が上条さんを振る事が目的となっているのであれば、お姉さまが上条さんとメールやデートを楽しまれようが私は口を出しません。むしろ、全面的に協力させて頂きますの」

「白井さん…」

それは一見、共闘の申し出であった。

全面对決も覚悟していた初春は、穏やかな表情で話す黒子に一瞬安堵するが…

「ただし！」

急に語気を強められ、ビクッと肩を震わせる。

「『上条さんを振る』、この目的に万が一変更があった場合、私はあなた方の作戦を全力で叩き潰します！のでそのおつもりで！」

白井の眼はマジであり、心なしか殺気まで帯びていた。

「も、問題ありません、あくまでこれは振るため…ですから！」

勢いに吞まれそうになりながらも、初春は負けじと氣勢を張る。負けられない、という決意が表情に表れていた。

風紀委員の業務を終え白井は岐路についていた。何やらブツブツと呟いている。

「全く、初春ときたら見え透いた嘘を…」

昨日の喫茶店での3人の反応と、その晩の御坂の反応、そして先程の初春の反応で、3人が行ってきた作戦の概要は大体掴めていた。

少なくとも、初春と佐天は上条と御坂をくっ付けようとしており、『振るため』というのは建前であることは明らかだった。本当ならこんな作戦、即叩き潰したいところであったが…

「下手に手が出ないのは少々厄介ですわね…」

安易に動けない事情があった。御坂と上条を表だつて妨害すれば、よっぽど上手く工作しない限り自分が真っ先に疑われる事になる。そうなれば御坂から嫌われてしまう事必至であり、本末転倒もいとこい。

そこで白井は、表面上協力するフリをしつつ、二人を監視する事にした。もちろん、2人を結ぶ気などさらさら無い。御坂を上手く誘導し、何としても上条を振ってもらう。万が一それが失敗し、二人が結ばれようもんなら…上条がお姉様に手を出そうもんなら、その時は…（規制）

「お姉様は私のもの…誰にも…誰にも渡しませんわ…フヒ…フヒヒ
ヒ…！」

「白井さん…何だか怖…」

偶然通りかかった佐天だが、声をかける事はできなかつた…

第14話…とある黒い影…2（後書き）

シリアスパートでも扱いやすい！

黒子さんマジ有り難いつす！

文字量が毎回増えていってます。今までが少なすぎた？

今回の2800文字は、1話分としては妥当な数字何でしょうか…

第15話：名前大作戦（前書き）

《あらすじ》

作戦開始から3週間経過。

遂に作戦が白井にばれ…

第15話：名前大作戦

白井「それでは今日も早速始める事にいたしますわ。何か良いアイデアのある方はいらっしやいませんか？」

御坂「ちよっとアンタ、いきなり仕切ってんじゃないわよ！」

今日も集まったのはいつものファミレス。

白井黒子の参入により、作戦会議場は異様な雰囲気放っていた。

最初に切り出したのは白井であった。

黒子「まずは、お姉さまと上条さんの仲がどこまで進展されたのかを教えて頂きたいんですの」

佐天「よくぞ聞いてくれました！白井さん、驚かないで下さいよ！御坂さんは何と！」

そこからは、待ってましたとばかりに佐天と初春が交互に今までの経緯の解説を始めた。メールのやりとり、スーパーでのデート、手を繋いだ事や間接キス…今までの事を、多少誇張を交えながらも順々に、そして自慢げに解説していく。横で聞いていた御坂も、まんざらではない様子であった。

佐天「どうですか白井さん、このラブラブっぷり！」

御坂「ちよっと二人とも、ラブラブだなんて…エへへ…」

しかし白井からは特に大きな反応や動揺する様子は無く、それどころか自慢げな3人を嘲笑うかのような言葉を口にしたのであった。

黒子「へっ、皆様お子様ですわねえ…私から見ると、お二人はまだまだラブラブなどとは到底思えませんの」

一蹴された事にムツと顔をしかめ、思わず反論する初春と佐天であったが…

初春・佐天「え〜？その『ちよつと黒子、どこがラブラブじゃないって言うのよ！』」

同時に反論した御坂の剣幕に二人は凍りついてしまう。

初春・佐天「…み、御坂さん…？」

御坂「あ…いや、その…」

無意識に大声を上げていた自分に気付き、顔を赤くする御坂。その様子を見て黒子は口に手を当てて嘔き出していた。

御坂「コホン…く、黒子、どこに問題があるっていつのよ…」

御坂は気持ちを落ち着かせ、改めて黒子を問いただす。

白井「ではズバリ聞かせて頂きますが、お姉さまは上条さんの事を何とお呼びしてますの？」

「「「え…！」「」」

白井は先程初春と佐天が話した解説には触れず、予想外の事を指摘してきた。

(そういえば)

(今まで…)

(ずっと…)

御坂は上条の事を、アンタとしか呼んで来なかった。あとはせいぜい『アイツ』とか、『あの馬鹿』。肝心な事に今頃気付いた3人であった。

黒子「上条さんをお姉様に惚れさせたいのであれば、やはり名前で呼ぶのがベストかと思われませんが、いかがでしょうか、お三方」

佐天「う、結構正論かも…」

初春「…い、異議無しです…」

御坂(ええ！？ちよつと2人とも…！)

白井「という訳で、今から上条さんの事は、当麻と呼んで頂きますようか」

御坂「ふえっ!?!」

佐天「お、いいですねえそれ!」

初春「ちよつと佐天さん、そんな話に乗っちゃダメですって!御坂さん、相手は年上ですし、まずは『上条さん』でも…」

初春は感付いていた。白井が意図的に御坂を混乱させようとしている事を。

しかし、勢いに乗る白井を止める事は出来なかった。既に佐天は白井に取り込まれつつある。

白井「初春、何を悠長な事を…。さ、お嬢様、早速練習ですわ。今すぐ上条さんの名前をおっしゃって下さいましっ」

御坂「え、ちよ…」

今まで名前はおろか、苗字さえ口に出した事が無い御坂にとって、それは最大級のムチャ振りであった。

初春と佐天に助け船を期待して目線を送ってみるものの、初春は目線を合わせてくれない。どうやら黒子に脅え、助けたくても助けられないようだ。佐天に至っては単純に興味津津になっており、黒子の味方状態であった。

正に四面楚歌である。

御坂「あ……う……」

初春「白井さん、もうこれ以上は……!」

白井「お黙りなさい初春!これはお姉さまが上条さんを手玉に取るためには避けて通れない道なんですの!さあお姉様、頑張って下さいましっ!」

もちろんそんな物は建前であつた。白井は単に御坂の免疫の無さを見て楽しんでいるだけに過ぎなかつたのだ。

(真つ赤なお顔も可愛らしくて素敵ですわ、お姉様!)

しかしその3秒後、白井に天罰が下る。

白井「ヴヘアッ!」

御坂「ふにゃ……」

初春「し、白井さん、御坂さん!?!」

御坂から漏れた電撃が直撃し、そのまま白井は気絶してしまつた。

白井が目を覚ましたのは、その後正気に戻つた御坂と初春・佐天の3人が次のデートプランを決定してしまつた後であつた。

その夜、上条は部屋でケータイの画面を眺めながら頭を掻いていた。

画面に表示されているのは、夕刻過ぎに御坂から送られてきたメール。『明日会える?』といった簡潔な内容であった。特に用事も無かったため、明日も御坂と会う事になった訳だが…

「あいつ最近、どうしちゃったんだ?」

最近の御坂は、何故か自分に積極的に近付こうとしている気がする。

鈍い上条でも、そこまでは気付く事ができた。

しかし、その理由がさっぱり分からない。

「最近、あんまりケンカも売って来なくなったよなあ…」

勝負を付ける以外の目的で、自分に近づく理由があるのだろうか…

「あれ、もしかして…」

上条はついた

「あいつ、俺の事…」

御坂の気持ちに

「暗殺…!？」

気付けなかった。

正面から勝負しても勝つのは難しいと判断した御坂が、新たな手段で自分を倒そうとしている…

そんな被害妄想を膨らませ、背筋を凍らせる上条。

「仲好くなつて、油断した所をビリッと…いい、いや、まさかそんな事ある訳無いよな…」

考えすぎかな？ハハハハハ、と笑って誤魔化す上条であったが、冷や汗は止まらなかった。

御坂達の目標達成は遠い……

第15話：名前大作戦（後書き）

やっつけ感バリバリかも…。

今後は週一更新は間に合わないかもしれません。

まさかまさかの200pt達成…完全に想定外です。

これからも応援宜しくお願いします。

第16話：名前大作戦 2（前書き）

《あらすじ》

上条と名前で呼び合っていない点を白井に指摘された御坂。
リベンジ（？）を果たすべく、デートに向かう！

第16話：名前大作戦 2

次の日の放課後、御坂は待ち合わせ場所に向かっていった。

『お姉さまは上条さんの事を何とお呼びしてますの？』

頭の中で、先日の白井のセリフをグルグルとリピートさせながら。

今まで、自分なりに頑張って上条との距離を縮めてきたつもりだった。

けど、黒子にはそれを全て否定された気がした。

しかし、自分とアイツが名前で呼び合う光景など想像もできない。

特に、自分が上条を名前で呼ぶ事などできそうにない。

しかし、黒子に言われっぱなしなのは気に入らない…！

そして、御坂はある作戦を考え出していた。それは…

「まず、アイツに私を、み…美琴って呼ばせる！」

上条とはお互いを名前で呼び合いたいが、自分から呼ぶのは癪だし、何より自分からは呼べそうにないので、まずは向こうに自分の名前を呼ばせるという作戦。積極的なんだか消極的なんだか分からない内容であった。

「アイツが私を名前で呼ぶようになれば、きっと私もアイツを名前で呼べるようになるはず…」

そうこうしているうちに、待ち合わせ場所に到着。

先に到着していた上条の姿を見つけ、駆け寄る。

駆け寄って来た御坂に、上条はいつも通りの声をかける。

「よっ、御坂」

「う…」

ごく普通に名前（名字だが）で呼んでくる上条に、軽く敗北感を覚える御坂。

加えてこの後決行する作戦が緊張を呼び、御坂から平常心を奪っていた。

「んで、今日はどこに行くんだ？」

「え？えっと…ま、まあ適当にお茶でもしましょ」

何とか平静を装って歩き出す御坂であった。

そして、この様子を遠巻きに見守る3つの影があった。

「あちゃ〜、御坂さん、やっぱり緊張しちゃってるなあ〜」

「白井さんのせいですよ！余計な事言うから…」

「あら、人聞きが悪いですわね。私は本当の事を言っただけですよ」

初春と佐天に白井を加えた3人が、遠くから御坂達の様子を眺めていた。

そして、初春と白井は静かに火花を散らしていた。

「白井さん、くれぐれも妨害行為だけはしないで下さいね！」

能力を使って何をやらかすか分からない白井に初春は釘を刺す。

「お姉さまの邪魔をすつもりなど毛頭ありませんので、どうぞご心配なく」

白井の返答は口調こそ穏やかであったが、心はこもっていなかった。

（まあ、万が一お二人が過ちを犯しそうになったら…その時は類人猿にタライでも落としてやりますわ…）

「…白井さん、今絶対善からぬ事を考えてましたよね…」

「フン、気のせいですわよ初春」

「あのお二人さん、熱くなってるどころ悪いんだけど…」

「なんですか!?!」「なんですよ!?!」

「美坂さん達、もう向こうに行っちゃいましたけど…」

「「あ…」「」

とりあえず近くにあった野外のフードコートでお茶することにした御坂と上条。

それぞれアイスティーとアイスコーヒーを注文し、木製の椅子に腰を下ろしていた。

そこは、人通りの多い商戦地区においてひと際洗練された雰囲気の人々を惹きつける人気のデートスポットである。

そしてこの日も、このお洒落な空間で数組のカップルが甘い時間を過ごしていた。

しかしそんな中で、何か異様な雰囲気を感じ出すカップルが一組存在していた。

(な、なんなんですか、この重い雰囲気は…!)

上条は焦ってた。先ほどから、御坂の様子が明らかにおかしいのだ。話しかけても素っ気ない返事ばかりで、目も合わせてくれない。

(もはや、今日が暗殺決行日なのか!?)

そんな的外れな妄想も手伝い、上条は不安を募らせていく。

一方御坂は、上条に自分を名前で呼ばせる事で頭が一杯であった。

(名前を呼ばせた後に自分も名前で呼んで、黒子をギャフンと言わせてやるんだから！)

しかしそんな事を考えるにつれ、緊張は鼓動と共に高まっていく。

そして、意を決して御坂は口を開く

「ねえ、ちょっとアンタ……」

第16話：名前大作戦 2（後書き）

ほんっとお待たせしまくって申し訳ありません…

私生活も一段落着いたので、これからはコンスタントアップしていきたいです。

以前のような週一投稿は厳しいと思いますが…。

連載停止中も読んで頂き、ptを下さった方々、本当に有難うございました。

そしてこれからも宜しくお願いします。

第17話：名前大作戦 3（前書き）

23年9月7日 僅かに改訂

《あらすじ》

上条と名前で呼び合う事いたい御坂。まずは上条に自分を名前で呼ばせる事にした

一方佐天達は、初春と白井の小競り合いが原因で御坂達を見失っていた。

第17話：名前大作戦 3

「全く、あの二人は最近いつもあんな調子なんだから」

手を頭の後ろに回しやれやれといった様子で、佐天は辺りを一人散策していた。

彼女は今、初春・白井と手分けして御坂達を探しているところであった。

佐天の言う『あの二人』とはもちろん、白井と初春の事である。

白井の参入以降、二人は事あるごとに火花を散らしている。

そして、その度に二人の仲裁に回るのが佐天の役割となっていた。

「こんな調子で、うまくいくのかなあ……」

面白半分でこの作戦を始めた事を、軽く後悔する佐天であった。

そうして数分ほど歩いたところで、野外の喫茶店に座っている上条達を発見する。

「おっ、いたいた！結構いい感じの店に入ってるじゃん！」

急いで白井と初春にメールで場所を知らせつつ、速やかに諜報活動に入る佐天。

御坂と上条の会話を探るべく、二人の視界に入らない席に陣取り、聞き耳を立てる。

* * * * *

一方御坂は、今日の計画を実行する段階に入っていた。

名前で呼び合っていない事を白井に指摘されたのは昨日の事。
その日の晩、御坂は自分と上条が名前で呼び合う姿を想像した。

『ねえ、当麻』

『なんだい、美琴』

理想の未来だった。明日から早速、名前で呼び合つと決めた。
白井にひと泡吹かせる(?)ため、そして、上条との距離を縮める
ために。

今こそ、一步を踏み出す!(呼ぶのは上条の方だが)

「ねえ、ちよつと…」

「ん?なんだ?」

「私の事を、これから…」

み…美琴って呼びなさい!」

佐天(い、いきなり!?)

御坂の頼み方、というか命令は、佐天は思わず突っ込みを入れる程
にストレートなものであった。

「…え？な、なんだよ突然」

案の定、上条は急展開に戸惑いを隠せない。

「え！？いやその……と、とにかく呼べばいいのー！」

「いや、理由になってないだろ…」

「い、いいから黙って呼びなさいって言ってんでしょうが！ー！」

そう言うと、御坂は両手をテーブルに叩きつけガタンと席を立つ。顔は恥ずかしさと怒りで真っ赤になり、体には電撃も帯び始めていた。

佐天（御坂さん、傍から見たら恐喝みたいになってますって！）

「わ、分かった分かった、呼びますからここで電撃は勘弁！」

このままでは、周りのカップルやその他大勢の一般人の方たちが丸焦げになってしまう…

周辺の安全を考えると、上条は御坂に従わざるを得なかった。不幸だ、心の中で呟く上条であった。

「じゃあ、呼ぶぞ…」

「…！う、うん…」

御坂に緊張が走った。ゴクツと唾を飲み込み、上条のセリフに注目する。

「美琴」

(うわ、アツサリ…)

佐天が拍子抜けする程に、抑揚のない声でサラッと名前を言ってしまった上条。

だが…

(あ、それでも御坂さん真っ赤になってるよ…！)

美琴の耐性は佐天が思っている以上に低かった。

(呼ばれた…)

「はあ、これでいいのか…ってあれ？」

軽く放心状態になっている御坂の耳には、上条の問い掛けは入ってこなかった。

(コイツに…呼ばれた…美琴って…)

「…おゝい、御坂さん？」

「へっ！？な、何！？」

「何って…なんか真っ赤だけど大丈夫か？」

「！…う、うっさいわね！アンタが呼…！」

「…？」

「ほ、ホラ、そろそろここ出るわよ！」

一人早足で歩いて行ってしまった御坂。

照れ隠しによる行動なのだが、上条にはやはり怒っているようにしか見えなかった。

(言われた通りにしたのに、何で怒っているのですか…)

お約束とも言える鈍感台詞を吐きながら、上条は御坂を追っていた。

* * * * *

「うん、一応成功かなあ、上条さんも一回は名前で呼んでたし」

色々突っ込み所は残るものの、目的を最低限果たせた事に佐天は安堵していた。そしてその直後、白井が初春を連れて、テレポートで佐天の前に現れた。

「あ、遅いよ二人とも！」

「す、すみませ〜ん、白井さんとなかなか合流できなくて…」

「それで、お姉様達はあれからどうなったんですの!?!」

佐天は事の経過を説明する。

「ほんとですかー!?!?とりあえず、良かったです!」

「フツ、私的的確な進言のおかげですわね」

「…白井さん、ホントにこの展開を狙ってたんですか?」

「もちろんですわ、何かご不満でも?」

「はい二人ともストップ!御坂さん達が動き出したから、今度こそ見失わないように着いて行くよ!」

佐天の仕切りにより、どうにか御坂達を見失わずに済んだ監視役、もとい野次馬3人。

それぞれの思いを胸に、御坂達の後を追うのであった。

第18話：名前大作戦 4（前書き）

《あらすじ》

喫茶店にて、上条に名前で呼ばせる事に成功した御坂。
そのあと二人が向かう先は…？

第18話：名前大作戦 4

喫茶店を出た二人は、繁華街からやや離れた通りの歩道を並んで歩いていた。

正確には、御坂の方が少し前を歩いている。

そして、上条には今の状況にある疑問を抱いた。

(俺達、どこに向かっているんだ?)

喫茶店で御坂は行き先も告げずに席を立ち、そのまま歩き続けている。

上条も一緒に並んで歩いてはいるが、どこへ向かっているのかは一向に見えてこない。

とりあえず行き先を尋ねべく、上条は御坂に話しかける。

「なあ御坂、どこに行…ってあれ？」

しかし上条は質問を途中で止めた。御坂の様子がおかしい事に気付いたのだ。

まず、上条の声が届いていないようで、話しかけたのも関わらず反応が全く無い。

顔も心なしに赤くなっており、あげくにニヤつきながらブツブツと呟いている。

思わず立ち止まってしまおう上条。そして御坂はそれに気付く事も無く、一人歩いて行ってしまった。

「どうしちゃったんだ？アイツ…」

頭を掻きながら、御坂の背中を眺める上条であった。

御坂は自分の世界に入っていた。

(『美琴』 『美琴』 『美琴』)

自分の名前を呼ぶ上条の声を、未だに脳内で繰り返していたのだ。た。

頭の中は上条ボイスに支配され、外部からの情報はほとんど遮断されていた。

そんな御坂を正気に戻させたのは、肩に突然かかってきた衝撃であった。

「おい御坂っ」

早足で追いついて来た上条が、肩に手を掛けてきたのだ。

「うえっ！？な、何！？」

軽く手を置かれただけであり、それは衝撃と言えるほど大したものではなかった。

しかし御坂は電流でも流されたかのようにビクツと肩を震わせ、妄想から現実の世界へと引き戻された。
逆に上条は御坂が元に戻った事を確認し安堵する。

「お、やっと気付いた。何考えてたんだよお前」

「え！？あ、いや別に何も、はは…」

「…まあいいや。それより御坂、これから行くところ決まってるのか？」

「え？いや、特に決めて……ってちよつとアంత…」

「え！？決めて無かったのかよ！どンドン歩いて行くから、てつきり…」

「そんな事より！何で名字の方で呼んでんのよ！」

「え？何でって……ていうか、ずっと名前で呼ばなきゃいけなかったんですか？」

「と、当然よ！ちゃんと『これから呼んで』って言ったでしょ！」

（ああ、言ってたっけか。けど…）
上条は心の中で呟いた。お前は俺を名前で呼んでないじゃん、何で俺だけ…と。

だが、ここでストレートに言い返すと、御坂がムキになって状況が悪化しかねない。

そう冷静に考えた上条は、とっさに思いついたある策を実行に移す

のであった。

(フツフツ、大人な上条さんは変化球で揺さぶりをかけますよと)

「じゃあ…お前から俺の事を当麻って呼んだら、俺も呼んでやるよ」

「なっ！何でそんな事…！」

「だって俺の方から呼ぶだけじゃ、不公平だしな」

「う…」

思いもよらぬ上条の攻勢に御坂は動揺を隠せず、これ以上言い返す事ができなかった。

上条は御坂のうろたえる様子を見て、意地悪な笑みを大人気なく浮かべるのであった。

御坂は混乱気味ながらも、この状況を切り抜けるベストな手段を必死に考え始める。

(今名前で呼ばなきゃ、コイツに言い負かされた事になっちゃう…けどコイツの言いなりになるのは糞だし…ああもうどっちに転んでもアイツに分があるじゃない！いつそぶつとばせば…)

そして数十秒が経過。

一言も言葉を発さず、ひたすら考え込む御坂。

「…あのー、御坂さん？何もそこまで悩まなくても…」

流石に不安になった上条は話しかけるが、御坂の耳にはまたもや届かない。

（なんか嫌な予感がしてきたのは気のせいでしょうか…）

更に十秒程が経過した頃、御坂の考えはようやく決断に近付いた。

（癪とかプライドとか、そんなのどうでもいい！名前で呼び合っ、そしてアイツとの距離を縮める絶好のチャンスじゃない！）

…御坂は意を決した。逃げるな、と自分に言い聞かせながら。

そして突然、上条の腕をおもむろに掴む。

「うわっ！な、なんだ!？」

「ちよつと来て!」

そのまま上条を黙々と引っ張っていく。

着いた先は、人気の無い路地裏であった。

「み…御坂さん、何でこんなところに…あのまさか、勝負だとか言い出す『うるさいっ！』ひっ！」

ビビる上条を御坂は一喝し、更に言葉を続ける。

「何でって、その…アンタを名前で呼んでやるために決まってんでしょ…！」

「へ？（人目に付かないからか？だからってこんな所で…）」

「じゃ、じゃあ呼ぶから黙ってて…！」

「…ああ…」

呆れつつも、結局いつものように主導権を握らている自分に溜め息を付く上条であった。

そして御坂は口を開くと、絞り出すようにして上条の名を呼び始めた。

「…と…」

(うっ、…思ってた以上にヤバイ…！)

一文字目を口に出しただけで、御坂は今まで経験した事が無い程の恥ずかしさに襲われた。

目の前の男の名は、御坂にとってはまるで封印された言葉の様に思えた。

声に出そうとするだけで、口が、喉が言う事を聞かなくなる。

緊張によって高まる鼓動、震える肩。精神は限界に達しようとしていた。

そして、御坂の異変はそれだけには留まらなかった。

精神が不安定になった事で能力が無意識に暴走を始め、体外に電流が漏れ始めたのだ。

それを見て、ギョツとする上条。

「！？み、御坂さん？なんかビリビリ言い始めてる気がするの。気のせいでしょうか！？」

「と……と……っ」

(頑張れ私！コイツだって出来た事なんだから私だって…！)

精神は更に追い詰められていく。それに比例して、電流も強くなる。

「…………と……と……っ」

(あと…あと一文字…！)

「み、御坂、落ち着けて!!俺が悪かったから!!なあ!!」

上条の必死の懇願も届かない。

「ああもうこうなったら直接右手で……ってダメだ、近付けねえ!」

御坂のを纏う電流の量は既に猛烈なものとなっていた。

右手で御坂に触れて暴走する能力を直接抑えようにも、既に近寄れる状態ではない。

そして

精神状態は限界を突破。

御坂は、上条に向かって全てをぶつけるように叫んだ。

「とっまあっつ!!!!!!」

大量の電撃をぶっ放しながら。

辺りに爆音と青白い閃光、そして一人の絶叫が響き渡った。

「ぎゃあー！ー！ー！っ！っ！不幸だー！っ！！」

数十秒後

「ハア…ハア…」

極限の精神状態が続き、加えて能力を大量に使用した御坂もまた、息を切らしていた。

疲れ切った様子で、その場にへなへなと座り込む。

そして上条は

「ハア…ハア…」

無事であった。

元いた位置から数メートル後退したところで、右手を翳しながら尻もちをつく上条の姿があった。

強烈な電撃を浴びせられながらも右手でかろうじて防ぐ事ができた

ため、体は無傷である。
しかし衣服は所々焼け焦げており、電撃が凄まじいものであった事を物語っていた。

そして、いきなり電撃を浴びせられる仕打ちに対して流石に怒りを覚えていた。

殺されかけたのだから無理も無い。

「おい！ふざけん…な……」

しかし、御坂に詰め寄り文句を言おうとする上条。

だが、御坂と目が合った瞬間、言葉途中で固まってしまった。

そこにいた御坂は、生意気で好戦的ないつもの姿と全く違ったから。

上がる息、火照った顔。上目遣い。地面に座り込む、弱弱い姿。

それら一つ一つが、上条の鼓動を静かに跳ね上げた。

「ちょっと…何いきなり固まってるのよ…」

「あついや……そ、それよりいきなり電撃かましてんじゃねえよ！あれ、本気だっただろ！！さすがの上条さんでも死に掛けたぞ！！」

「え!？」

そう言われて、ハッと辺りを見渡す御坂。

上条の焦げた服、周りの地面や壁の焦げ跡。

それらを確認し、御坂は自分が能力を暴走させていた事に初めて気付く。

「そ…それは、その…あ、アンタが挑発してきたからでしょ!？アンタが悪いのよ!！」

「相変わらず訳分かんねえ屁理屈言いやがって…それだけで殺そうとすんなっての!！」

「うっさい!どうせ効かないんだからいいじゃない！」

結局、すぐにいつもの調子に戻ってしまう二人であった。

そんな中でも御坂は当初の目的を思い出し、畳みかけてくる。

「ていうか、早く名前で呼びなさいよ!私も呼んだんだから!！」

「いや、ビリビリうるさくてよく聞こえなくうおっ!！」

上条に再び電撃が放たれた。

「アンタ…死にたい？」

「だあ、分かったからコイン出すな！呼びます、呼びますってば！」

上条は軽く息を吸い込み、御坂はその口元に注目する。

ここで上条が無事に呼べば、御坂の目的は果たされ、上条は解放され、無事終わる筈であった。

だが…

「美『おねえさあ~~~~!!!!』」

上条の言葉は無情にも、突如響いた叫び声によってかき消されてしまった。

泣きながら現れたのは、ツインテールが特徴的な少女。

「くっ黒子！？、アンタなんで！（ちょっとバカ、アンタが出てきちゃったら作戦がバレる…！）」

「ううっ…御姉様が…まさか人を殺めてしまわれるなんて…私…うっうっ…！」

「ちょっと、なに訳分かんない事言ってるのよ！」

「ですが…それも愛する御姉様を選ばれた道…！黒子は、そんな御姉様と罪を、丸ごと受け入れますわぁっ！」

「い、いいから早く離れろっ！（ヤバい、このままじゃ…！）」

「逃げましょう御姉様っ！！かくなる上は、私と愛の逃亡生活を…」

上条「…あの〜、お二人さん…？」

「何ですのっ！！今御姉様と重要な話を話しあっていますのよ！お話は後に…え？」

上条がピンピンしている事に漸く気付いた白井。額から大量の汗を流れ始める。

「か、上条さん、ご無事で…ぎゃひい！」

「じゃ…じゃあ当麻、またね！」

御坂は電撃で黒子を眠らせると小脇に抱え、逃げるようにその場を後にした。

「…不幸だ…」

急展開に置いて行かれ、一人寂しく帰路に着く上条。

ポロポロになった服を見やり、大きな溜め息をついたのであった。

「てかアイツ、最後に俺の名前アツサリ言えてたな…」

第18話：名前大作戦 4（後書き）

無駄に長くなった；；

黒子乱入の理由は次話で明らかにします。きつとします。

今まで投稿した分を読み返してみたら全体的にグチャグチャでした…
近々、全体的に大幅改編するかもしれません。

第19話：名前大作戦 5（前書き）

タイトルで毎回何かしらミスしちゃってすみません……
今回は大丈夫なはず……

《あらすじ》

御坂と上条の元へ乱入し、電撃で眠らされた黒子。
目を覚ますと、そこは……

第19話：名前大作戦 5

「う…ん…」

周囲の喧騒で白井は目覚めた。

「あっ！白井さん、気が付きましたか？」

「…初春？」

うつすらと回復する白井の視界に最初に映ったのは、安堵の表情でこちらを見下ろす初春の顔。後頭部に柔らかい感触を感じ、白井は今自分が初春の膝の上に横たわっている事を理解する。

「（ここは…）」

周りからは学生たちの喧騒な喋り声が聞こえ、鼻には脂っこい匂いが入ってくる。

ここは白井も良く知る場所であった。

「…ハンバーガーショップか何かですか…？」

「はい、マックの中ですよ」

マクロナルハンバーガー。

学生に人気があり、学園都市でも多くの店舗を構えるファーストフード店である。

白井は混乱した。

なぜ自分はこんな場所で初春に膝枕されているのか。

そもそもなぜ気を失っていたのか。

何かショックを受けたのか、その辺りの記憶が飛んでいたのだ。

横たわったまま、白井は今日一日ををゆっくりと振り返り始める。

白井「（確か今日は初春と佐天さんと3人で、御姉様のデートを監視しに来たんですよ…）」

尾行して間もなく初春と言い争い、その間に御坂達を見失ってしまった。

手分けして探したところ、喫茶店に居るところを佐天がすぐに見つけ出した。

佐天の報告によると、そこで御坂は上条に名前で呼ばれたのだとか。

白井は湧き上がる殺気を抑えながらも、店を出た二人を再び追跡した。

白井「（そして、あの類人猿があるう事が御姉様を挑発しやがったんです…）」

上条が、自分を名前で呼ぶよう御坂に要求しているのが聞こえた。御坂はしばらく考え込んだ後、やや切羽詰まった様子で上条を路地裏に連れ込んだ。

3人は路地裏にまで付いて行く訳にもいかず、通りで待機してい

た。

白井「（その直後に、大きな音が御姉様達の方角から聞こえたんですの！）」

それは、白井がよく知る音だった。

御坂が能力を相当な強さで使用した際に起きる轟音。

路地裏で何か不穏な自体が発生している事が容易に想像できた。

そして白井は勘違いしてしまった。

御坂が挑発された事に対して逆上し、上条に本気で攻撃を加えたのではないかと。

白井「（それで、思わず御姉様を止め飛び出してしまったものの、あの類人猿は何故か傷一つ負ってなくて…）」

冷たい空気が流れ始めたのを白井は感じた。

直後、御坂が白井に抱きつかれたまま帯電を始め…

白井「思い出しましたわ！」

白井は叫びながら、上体を初春の膝の上からガバツと起こす。

白井「私が気絶していたのは、お姉様が愛の鞭を…」

御坂「色々思い出したみたいね、黒子」

白井「ひっ！」

弾かれた様に背筋を伸ばす白井。
声の方向…テーブルを挟んで向かいの席に、恐る恐る首を回す。
そこには、殺気を放ちながら座っている御坂の姿があった。

御坂「あの後、私がアンタをここまで担いで来てやったのよ。近くに公園とかも無かったしね」

御坂は口調こそ穏やかであった。
だが声色は冷たく、怒りが滲み出ているのを白井も初春も感じていた。

特に御坂の隣に座っている佐天は見えない迫力をモロに受け、恐怖で青ざめていた。

白井「お、おね…」

御坂「さて、さっきの件について、詳しく説明してもらえるかしら？」

余りの恐怖で言葉を失う黒子に、容赦なく尋問は開始された。

- 数分後 -

御坂「…ふーん、それでアンタは飛び出してきた、と」

白井「は、はいですの…」

白井は一通りを話し終えた。

話を聞いている間も、御坂はずっと冷静であった。怒りを露わにする事は特に無く、反応は最低限の相槌のみ。だが、感情を出さない御坂の態度はむしろ白井達には恐怖を与える事となった。

そして、しばらくの間沈黙が続いた。

御坂は腕を組み、窓の外を見やりながら不機嫌そうに黙っている。初春と佐天も話しかける訳にはいかず、口を開けない。

沈黙は周囲の客席にも少しずつ広がっていき、店内は不気味に静まり返っていく。

そして、空気に耐えられなくなった白井は意を決した。

白井「お、御姉様…私、決して御姉様の邪魔をするつもりだった訳では…」

声は上ずった声で、必死に言葉を絞り出して行く。

白井「ですから、その…許して頂きたいんです…」

初春「あの…御坂さん。白井さんに悪気があなかったのは本当なんです…！」

佐天「そ、そうなんですよ！あれは、御坂さんを思つての行動だったんですって！」

初春「だからその…あんまり責めないであげて下さい…」

先に初春が、それに続くように佐天も、恐る恐るながら助け船を出

す。

御坂「……黒子」

3人の言い分を黙って聞いていた御坂だったが、ここにきて漸く口を開く。

白井「…！」

店内に、最大級の緊張が走った。御坂の次の言動に注目する。

御坂「この件はもう許してあげるわ。今度からは気を付けなさいよ」

白井「ほ、本当ですよ!？」

御坂「言っとくけど今回だけだから……って、くっ付いてくんない！」

白井「御姉様〜!!わだぐし、一生付いて行きますわ!!」

御坂の胸に涙眼で空間移動飛してきた白井を、御坂は鬱陶しそうに殴り落とす御坂。

とりあえず修羅場は脱し、安堵する初春と佐天であったが、ある疑問も同時に浮かび上がって来た。

佐天「（なんか、意外とアッサリだったね…）」

初春「（それ、私も思いました…）」

御坂は今回の件で、自分にも非を感じていた。

無意識とは言え能力を暴走させ、実際に上条に向かってぶつ放してしまっただ。

殺そうとしていたと思われてもおかしくない状況を作っていたのは確かだった。

御坂「（良く考えたら、黒子が飛んで来るのも無理は無い状況だったのよね…）」

先程、黙り込んでいる間にそんな事を考えていた御坂。

もう能力は暴走させまいと誓うのであった。

御坂「そうだ。当…いや、アイツに黒子の事をどう説明すればいいかな…」

初春「白井さんが偶然通りかかった事にすれば誤魔化せるんじゃないですか？」

佐天「一回くらいなら、それでどうにかなりそうだよね」

白井「では責任を取ってわたくしが直接、上条さんに説明と謝罪をして参りますわ」

直後、ジトつとした目線が白井に集中する。

白井「な、何ですの!？」

佐天「不安…」

初春「同感です…」

御坂「アンタ、変な事企んでないわよね」

白井「なっ」

自分の人望の無さに少なからずショックを受ける白井であったが、今は違う話題を振って場を誤魔化す事にした。

白井「そ、それよりお姉様!路地裏は結局何をされていたんですの!？」

佐天「あ、それ私も気になってた!あの時、上条さんと一体何があったんですか!？」

初春「あと御坂さん、上条さんに名前で呼ばれた感想は!？」

御坂「ええ!?!いやそれは…!」

白井の一言により、僅かに残っていた緊張感は完全に霧散。

いつもの雰囲気に戻り、御坂は3名からしばらく質問攻めを受ける事になった。

佐天「え〜!!御坂さんも名前で呼んだんですか!?!聞いてみたかったなあ〜!」

初春「スゴイですよ御坂さんっ!!また一步前進しましたねー!」

御坂「ちよつと、声が大きいつてば!」

白井「御姉様！ここで今一度、上条さんの名前を呼んで下さいまし！」

佐天「おおっ、いいですねそれ！私達にも聞かせて下さい！」

店内にも、いつも通りの喧騒が戻ってきていた。

最終下校時刻直前まで駄弁った後、4人は現地解散でそのまま岐路に着いた

御坂「それじゃまたね、初春さん佐天さん」

白井「かなり暗くなってしまいましたわね、二人ともどうかお気を付けて」

初春「じゃあ、また何か決まったら連絡下さいね」

佐天「二人ともまたね〜！」

〜 帰り道、初春・佐天 〜

二人は門限が迫っている状況であり、帰路を急いでいた。

そんな中で佐天は今日一日を思い返してある事を感じていた。

「（何だかんだ言って、初春は白井さんの事を信頼してるんだなあ…）」

白井がこの作戦に加わってからというもの、初春は白井といがみ合う事が多くなった。

今日も、デートの前半に初春と白井が言い争いを始めるなど、やや険悪なムードであった。

自分が考えた作戦が二人の仲を引き裂いてしまったのではないかと
思うと、心苦しくもなった。

だが白井が気絶した際、率先して介抱したのは初春であった。

白井が御坂に謝っている時も、初春は白井を庇っていた。

二人の間に無意識に結ばれている強い絆を佐天が垣間見た瞬間であ
った。

「あの佐天さん、私の顔に何か付いてますか？」

佐天がこちらを見つめている事に気付き、初春は佐天に話しかける。

「いや、初春は何だかんだ白井さんを信頼してるんだなあって思っ
てただけ」

「なっ！？なな、何ですか突然！」

特に隠す事無く、考えていた事をほぼそのまま口に出す佐天。

突然にそんな事を言われた初春は、動揺を隠せず思わず赤面する。

「あ、さっきの膝枕や、白井さんを御坂さんから庇った事を言っ
てるんですか！？あれは別に、信頼とかそういうのは関係無いですよ
！」

初春の言い訳はなおも続いた。

「私の監督不届きで白井さんを暴走させちゃったから、責任を取って庇ったんですよ！白井さんは御坂さんが絡むと何をやらかすか分からないですから、私が見張って無くちゃいけないんです」

白井が聞いたら憤慨間違い無しのセリフを容赦なく吐く初春。だがそれも佐天には、親しい仲である事の証に映った。

「全く、照れちゃってカツワイイなあ初春は〜！！」

「きゃあっ、こんな道端でやめて下さい〜！てか、早く帰らないと…ひゃあっ！」

しばらく路上でのじゃれ合いが続いた。
二人とも、門限の事は忘れていた。

〜 常盤台学生寮 〜

初春達と別れてから、御坂と白井は空間移動によってすぐに寮に到着。

そのまま夕食と入浴を済ませ、間もなく消灯時間を迎えようとしていた。

「ねえ黒子」

「何ですか？」

ベッドに腰を降ろし、掛け布団に足を潜り込ませ、蛍光灯のスイッチに手を伸ばしていた白井は、御坂に声を掛けられその手を止める。今日の失態を再び責められるのでは、と少々身構えたが、御坂の口から出てきた言葉は予想と正反対の内容であった。

「ありがとうね」

「え？」

驚く白井に言葉は続けられる。

「アイツと名前で呼び合えたのは、昨日アンタが指摘してくれたおかげだからね。だから、お礼言つところと思って。」

感謝の言葉と共に、優しい微笑みが白井に向けられた。

四六時中一緒にいる白井でも滅多に見ない、ましてや向けられた事など無い表情。

白井の心が、チクツと痛んだ。

佐天や初春と違って、白井は御坂と上条が恋愛関係になる事など望んではないない。

この作戦に参加しているのも、御坂を応援する為ではなく、監視する事が目的であった。

昨日の自分の進言が二人の仲の発展に貢献したのも、単なる偶然。

良心の呵責に白井に襲いかかった。

「それじゃ、おやすみ！」

「お姉様、私は…」

「ん、何？」

「いえ、何でも…何でもありませんわ。ではおやすみなさいませ」

口元まで出かけた本音を危うく抑え込み、蛍光灯のスイッチを切る。

「（こんなところで引き下がる訳にはいきませんの…！）」

白井は布団を頭まで被り、寢床に付いた。

「（御姉様、黒子は自分の事しか考えていない、いけない子ですの…お褒めの言葉を貰う資格など、私には無いんですの…！）」

第19話：名前大作戦 5（後書き）

自分にしては長い…。しかし質は文章量に比例せず。
途中から書いてて訳わかんなくなってきたしまいました。

1話と4話を改編。

特に3話辺りに大きく手を加えてました。
宜しければ目を通してやって下さい。

第20話：上条×黒子 ！？（前書き）

《あらすじもどき》

黒子の乱入騒ぎから一日が経った。

第20話：上条×黒子 ！？

日が色を変え始める夕暮れ時。

学校から解放された学生達が最も活気づく時間帯である。

にも関わらず、街の通りを気だるそうに一人歩く高校生がいた。

くたびれた表情で肩を下げて歩く様から、相当に疲れている事が窺える。

その高校生の名は上条当麻。

彼は先日からの様々な出来事により、上条の精神と体力は大きく削られていた。

昨日は御坂に半ば無理矢理名前を呼ばされ、電撃を浴びせられ、最後には置いてけぼりにされ…

ついでに服も電撃でダメにされ。

そして不幸はそれだけでは終わらなかった。

帰宅してみると、停電によって冷蔵庫は機能停止状態で、食材全滅。

停電の原因はやはり誰かさんがぶっ放した一撃によるもの。

そして、停電が発生したのは何故か上条宅周辺のみという不運。

その晩は居候にロクな料理を提供できず、手痛い制裁を食らう羽目になった。

もっとも、居候が怒っていた原因は、食事だけが原因では無かったようだが…

そして今日、そんな上条に追い打ちを掛けるようにして補習が待っていた。

しかも補習内容は能力開発。

通常的能力が発動する見込みが無く、その事を自覚している上条にとっては辛い時間の一つであった。

そんな不幸のオンパレードで、上条はかつて無いほどに疲労していた。

そして、上条を疲労させる要因はまだ有った。

昨日から現在まで、上条の心の中に、原因不明のモヤモヤした感情が巣食っているのだ。

加えて、電撃をぶつ放した直後の御坂のあの表情が頭から中々離れない。

きっとモヤモヤするのは疲れが原因、御坂の顔がはトラウマになっってしまったからだろう

そう判断した上条は、昨日の事など忘れて今日はゆっくり休もうと決めた。

この後、スーパーで食料の買い出しを終えたら即帰宅し、のんびり休息を取る予定だった。

しかし、そんな幻想は、ある少女の登場でブチ壊される事となった。

「ご機嫌麗しゅう」

「ゲッ！」

上品な仕草と言葉遣い、特徴的なツインテールの少女。そして昨日の急展開の原因となったお騒がせ人物。

文字通り、その場に『突然』現れたその少女の名前を知っていた。

「白井……」

早く帰宅し、昨日の事は忘れたい上条にとって、今これ程会いたくない人物もいなかった。

「それで…上条さんに何か用ですか…？」

聞くまでもない質問だった。

上条も本当は分かっていた。

わざわざ自分の前に現れて来た時点で、白井は自分に用が有って来た事を。

だが、上条はそれでも僅かな可能性に掛け、願った。

白井が目の前に現れたのは単なる偶然である事を。

白井は自分に用など無い事を。

しかし…

「先日の件についてお話したいのですが、少々お時間を頂いても宜しくて？」

「（やっぱり…）」

悪い意味で予想通りの回答に、がっくりと肩を落とす。

だが、上条ははまだ諦めなかった。

「（今日は譲る訳にはいかねえ！）」

自分だけの時間《パーソナル・タイム》を死守するべく、精一杯の抵抗を開始した。

「いや、俺は昨日の事なんか全然気にしてないんで！では用事があるんでこれで失礼！」

そう言うつや否や上条は白井に背を向け、猛ダッシュを試みる。

現状で唯一となる抵抗手段、『逃走』であった。

しかし、僅か一歩ほど踏み出しただけで、上条は足は止めてしまった。

「どわっ！」

上条が逃走予定だった方向に、空間移動で先回りした白井が立って

いたからである。

上条は早くも万策尽きる事となった。

そして白井は、何事も無いような笑顔で勝手に話を進めた。

「まあ立ち話も何ですので、お茶にでも致しましょうか」

上条にはそんな白井の微笑みが悪魔に見えた。

「いや、だから用事が…」

「まあ、偶然にも目の前に喫茶店が！さあさあ上条さん、参りましようー！」

白々しい事を言いつつ、白井は光速で上条の腕をガシッと掴む。

もはやそれを振りほどく体力も、どこが偶然なのかと突っ込む気力も上条には残っておらず、拉致も同然に喫茶店に連れ込まれて行くのであった。

「不幸だ…」

白井は聞こえないふりをした。

第20話：上条×黒子 ！？（後書き）

自分でもまさかの短間隔更新！

こんなにすんなり出来あがったのは半年振り。

まるで連載初期のような感覚で作文が進みました。
何が起きたのか…。文が短いのも有りますけどね。

1～4話に続き、5話以降も改正しているので宜しくです。

第21話：上条×黒子 ！？ 2（前書き）

《あらすじ》

昨日の事を弁明したい黒子と早く帰りたい上条。
その二つが交差する時、物語は始まる…！？

第21話：上条×黒子 ！？ 2

そんなこんなで、喫茶店に連れ込まれた上条。

「俺はコーヒーでいいよ」

早く帰りたい一心で、メニューを見ずにさっさと注文を決めてしま
う。

「では、私はミルクティーで」

白井もその空気を呼んだのか、同じく注文を即決。

付近を歩いていた店員を呼び止め、二人分の注文を済ますのであ
つた。

と、白井はここまで表面では礼節をわきまえて振る舞っているが、
内心はそう穏やかではなかった。

何しろ今は、愛すべきお姉様をたぶらかす最も憎たらしい人物と相
対している状況なのだ。

出来る事なら今すぐにでも鉄矢を脳天にブツ刺してやりたかった。

しかし白井は先日失態を犯してしまった身。

今日また下手な事をすれば真っ先に疑われ、御坂からの信頼は今度
こそ地に落ちてしまっだろう。

そういう訳で、ひとまず昨日の後処理が済むまでは猫の皮を被る事に決めていた。

「それで白井、話つてのは何なんだ？」

注文のコーヒーが来るのを待たずして本題に入る事を急かす上条。

「では早速、本題に入らせて頂きますわ」

白井もそれに応え、昨日の事を話し始めた。

「先日街を歩いていたところ、お姉様と上条さんのお姿を偶然にお見掛けしましたの」

偶然というのはもちろんウソである。

ここで注文した飲み物が運ばれて来た。

白井は運んで来た店員に軽く会釈を交わしたのち、再び話を続けた。

「そのあとお二人が路地裏に入られたので、わたくし不審に思つて後を追つて行きましたの。そうしたら、取り乱したお姉様が上条さんに向けて能力を使用されていたため、危険に思い思わず飛び込んで行つてしまつたんですの…」

悪気が無く、なおかつ仕方なく取つた行動であつた事を十二分に強調する。

ここはまあウソではなかった。

こうして白井は一通りの説明を終えた。

御坂達の作戦がバレていない事、そして上条が信じてくれる事を祈りつつ相手の反応を待つ。

それに対して上条は

「へえ、そういう事だったのか」

まるでヤラセであるかのようにアツサリと白井の言葉を信じてしまった。

「本当に、お騒がせして申し訳ありませんでしたわ」

仕上げとばかりに、謝罪に入る白井。

ツインテールを突き出すように、頭を下げる。

そして上条は…

「俺や御坂を想って取った行動だったんだろ？別に謝る必要なんか無えじゃん」

またもや白井の言葉を何の疑いも無く信じ、アツサリと許す。

この時点で、作戦が上条にバレないよう処理するという目標は早くも達成された。

白井は頭を下げたまま口の端をニヤリと上げる。

「上条さん、お優しいですね」

キラキラと輝くエフェクトを不自然に纏いながら、笑顔で感謝を口にする白井。

心の中ではチヨロいですわ、とほくそ笑んでいるのだった。

一方で相変わらず早く帰りたい上条は、話の区切りが付いたと見るとや行動を開始。

適温に下がったコーヒーを一気に口に流し込み、

「じゃあ用も済んだみただし、俺はこれで！」

と言って伝票を手にとって席を立ち、そのまま逃げるようレジに向かっていった。

コーヒーがやけに美味しい気がしたが、今はそんな事を気にする暇は無い。

レジの店員に伝票を渡し、後は支払いを済ませるだけ。

やっと帰れる、と安堵する上条であったが…

『ブレンドコーヒー一点、ミルクティー一点、二点で合計3800

円になります』

「…は？」

財布から千円札を一枚出そうとしていた手がピクリと止まる。

ファミレスでがつつり食べてもそうそう達しない値段に、上条は耳を疑った。

きつと聞き間違いだろう。

そう期待してレジの電子表示に視線を移すが、目に入った値段はやはり3800円。

事態を中々飲み込めず混乱し、その場に固まってしまう。

「あら上条さん、どうかされましたの？」

その間に悠々と歩いて来た白井は、喫茶店に連れ込んだ時以上に白々しく上条に話しかけた。

そして上条に代わって涼しい顔で万札を取り出し、支払いを済ませてしまった。

釣銭を受け取ると、未だ固まってる上条に視線を向け、勝ち誇ったようにこう告げた。

「ここは常盤台御用達の喫茶店です。お気付きになりませんか？」

コーヒーが美味しかった理由がやっと理解する上条。

「悪いな、白井…」

「誘ったのはわたくしなのですから、どうか気になさらないで下さいな」

喫茶店を出てから、上条は白井の後をトボトボと歩いている。

先程食らった精神的ダメージで、既に逃げる気力は失っていた。

もともと、逃げたところで空間移動で楽々捕えられてしまうのだが。

「白井さん、上条さんにまだ何か用があるんでせうか…」

上条はジトつとした目で白井に問いかける。

「まあそう嫌な顔なさらずに。ところで上条さん、先日お召物をロボロにされてましたわよね」

「え？ああそうだけど」

上条が昨日着ていた服は、御坂の電撃によって洗っても落ちない焦げ目が付いて再起不能となってしまうていた。

「では今から代わりの洋服を買いに参りましょう。私が選んで差し上げますわ」

「…へ？」

白井の突然の提案に、上条は目を白黒させた。

貧乏な上に服装に無頓着な上条は元々服のストック数が少なく、貧弱なローテーションで日々をやり繰りしていた。

そして、先日一着が欠けた事で現在ローテーションは崩壊の危機の真っただ中。

よって今から服を買いに行くという提案は上条にとって悪いものではなかった。

「まあ、それならいいか。じゃあ頼むわ白井」

「任せて下さいですの！」

「ってオイ…」

それから白井が案内した先は、予定通りに洋服店であった。

にも関わらず、上条は突っ込まざるを得なかった。

そこは、量販店ばかり利用する貧乏学生上条には不相応な高級店だったからだ。

「俺はこんな店で買う金なんか持って…」

「黙って次はこれを着て下さいな、その次はこれを！」

そして白井は上条の財力などお構いなしに、高級な服ばかりを持って来る。

それを上条は着せ替え人形の如くつつかえひつかえ試着させられていた。

「うーん、これは身長が足りないのでダメ、これも顔に合わないの
でイマイチ…」

ただでさえ金銭面で心細くなっている所に辛辣なダメ出しまでいちいち加わり、上条は涙目になっている。

そんなやり取りを数十分繰り返し、白井のコーディネートは漸くまとまった。

「まあ馬子にも衣装、こんなところですよわね」

「お前、何で喫茶店の時と全然態度が違うんだよ…」

昨日の後処理を喫茶店で済ませた白井には遠慮など残っていないかった。

「てか、今日の俺の全財産じゃ、このシャツ一枚すら買えねえよ！」

上条は自重しない値札の数字を指差して訴えた。

しかし白井は、そんな事は想定内といった様子で懐から何やら取り出し、上条に手渡した。

「こ、これは…」

『半額』『3割引』『2000円引き』などと書かれた割引券が数枚。

どれも併用可能である事が表記されていた。

「それをまとめて御使用になれば、貴方でも買える額になりますわ」

早い話が、ほとんど奢りであった。

「おいおい、いくら何でも…！」

上条は抵抗感を露わにする。何しろ先程奢られたばかりなのである。

「御姉様に焦がされてしまった服の弁償、そしてそのお詫びの印だと思つて頂きたいですの」

「でもそれは白井のせいじゃないだろ！それに俺の服はもっと安い…」

「受け取つて頂かないと、わたくしの気が収まりませんの。さあ、遠慮なさらず！」

細かい事はいいんだよ、とばかりに押し切る白井。

上条の背中をグイグイとレジまで押し、強引に会計させてしまった。

「てか、まだ高え…」

そしてファッションビルから出た二人。

「…ほんと悪いな、白井…」

罪悪感を感じているのか、上条が白井にかけて感謝の言葉は謝罪染みっていた。

「では上条さん、今度お姉様にお会いになる際は、必ずその服をお召になって来て下さいな！約束ですわ」

そう言うと白井は空間移動で姿を消した。

上条が漸く解放された瞬間であった。

そのまま、カバンと商品袋を持ってトボトボと歩きだす。

夕陽をバツクに猫背で歩く姿に哀愁が漂っていた。

結局今日は休息を取るところか、疲労を増やすだけの一日となって

しまった。

明日こそ…明日こそは休息をとってやる！

そう決意していた矢先、不意にケータイが震えた。

「げ、まさか…」

嫌な予感が走った。

ポケットから取り出し、恐る恐る画面を確認する。

メールだった。

差出人は

「やっぱりアイツかよ…」

『アンタ、明日空けときなさいよ！』

「不幸だ…」

上条がそう呟いている頃、白井は空間移動で街の上空を移動し、寮に向かっていた。

器用にも空間移動を繰り返しながら手に持った手帳に目を通し、不気味な笑みを浮かべている。

「くひ、クヒヒヒ…わたくしの作戦、順調ですよ！」

白井が上条にわざわざ高級な服を買い与えた理由。

それは、御坂に代わって謝罪する事が真の目的ではなかったのだ。

白井の手帳には、その具体的な内容が書き連ねてあった。

?いつも貧乏臭い服ばかり来ている類人猿に高級な服を着せる。

?オシャレな類人猿にお姉様は一方的に高感度を上げ、先走って類人猿に愛の告白。

?告白は時期早々に失敗、初春達の作戦は破綻。御姉様、御傷心。

?わたくしが御姉様を慰め高感度アップ!

?ホテルへGO!

要約すると、御坂の上条への好感度だけが一方的上がるよう仕組み、恋愛に疎い御坂を混乱・自滅させるというもの。

二人の仲を無理矢理引き裂く訳ではないのがポイントであった。

『上条が御坂に告白するよう仕向ける』という初春達の狙いとは似て非なる内容。

「我ながら見事な逆転の発想ですの！」

自画自賛する白井であったが、罪悪感も少なからず感じていた。

予定通りに事が運べば、愛するお姉様を傷付ける事になってしまう。

が、白井の決意は固かった。

「少々気は引けますが…黒子はやりますわよ！初春…あなたの作戦とわたくしの作戦、どちらが優れているか勝負ですの！」

ちなみにこの作戦、白井は今朝に思いついた。

日が沈む頃、白井は常盤台の学生寮に到着した。

「お帰り黒子、遅かったじゃない」

部屋に入ると、机で勉強中の御坂が振りかえって声を掛けて来た。

白井は早速、今日の喫茶店での出来事を報告する。

「御姉様、先程上条さんにお会いして事情を説明して参りましたわ」

「えっ、アンタもう行って来たの！？昨日の今日じゃない！」

「善は急げと言つではありませんか、御姉様」

「そりゃそうだけど、そういう事は事前に伝えなさいよ。それで、上手く誤魔化せたの？」

「それはもう、ばっちりでしたわ！」

御坂はそれを聞いてホツとしたような表情を浮かべる。

「それなら良かったけど…。あ、あと明日なんだけどね」

僅かに顔を赤らめ、視線を逸らす御坂。

「その、アイツに会う事になったわ」

「本当ですよ!？」

明日、お姉様が早速類人猿とデート。

いつもの白井にとっては間違いなく舌打ち物のイベント。

だが、今は違った。白井は一刻も早く二人を会わせたかった。

「さっき初春さんと佐天さんに偶然会ってね、アイツを名前で呼ぶところが見たいって言うから…」

「まったく、しょうがないですわねえ、あの子達は」

などと言いつつ、心の中ではG「初春!とばかりに親指を立てていた。

「とりあえず、明日が楽しみですわね。うふふ、グへへ…」

「…アンタ、私がアイツに会うのに嬉しそうだななんて珍しいわね」

果たして御坂の運命は!?

第21話：上条×黒子 ！？ 2（後書き）

あれ、主人公誰だっけ（＾p＾）
黒子さんキャラ立ち過ぎだよ…

第22話：上条×黒子 ！？ 3（前書き）

《あらすじ》

御坂を上条に急激に惚れさせる事で初春達の作戦を混乱させようと
企む白井は、
上条に洋服を買い与えたのであった

第22話：上条×黒子！？ 3

上条が白井に喫茶店やら洋服店やらに連れ回されている頃。

『御坂さんが上条さんを名前で呼ぶところ、私達も見てみたかったな』

『そうだ御坂さん、明日にでも上条さんに会いましょう、そうしましよっ！』

御坂は初春と佐天に強制的にデートを組ませされていた。

そしてその翌日の放課後。

上条との待ち合わせ場所に立つ御坂と、それを遠巻きに眺める初春、佐天、白井。

最早お馴染とも言えるこのフォーメーションで4人は待機していた。

御坂はいつもと比べ幾分落ち着いた様子であった。

何せ、今日の任務は後輩二人の前で上条を名前で呼ぶだけ。

「（おとといは呼べたんだし、そのくらいもう楽勝なんだから！）」

一度出来た事を繰り返すくらい、何て事無い

そうタカをくくる御坂に気負いは無かった。

しかし、御坂はここで余計な事を考えてしまう。

「（念には念をだし、一応練習しとこうかな…）」

そう思い立ち、よせばいいのに小声で上条の名前を呟いてしまったのだ。

「当麻…」

直後、御坂の頭は笑顔の上条で一気に埋め尽くされた。

そして、脳内の上条は微笑みながら御坂の名を呼ぶのであった。

「美琴　あくまで御坂の脳内の上条のセリフです

途端に、何かのスイッチを入れたかのようにポンつと真っ赤になっ
てしまう御坂。

「ちょっと何こんなので赤くなってんのよ私は！」

顔が茹で上がったように熱くなっているのを御坂自身も自覚し、頭
をブンブン振る。

こうして、今日も緊張気味にデートに臨む事となってしまうた。

「ねえ、なんか御坂さん急にソワソワし始めてない？」

「本当ですね、さっきまで落ち着いていたのに……」

「そうですね」

勝手にあたふたし始めた御坂を、佐天と初春は心配そうに眺めていた。

一方で白井は御坂に興味を示さず、初春達の会話にも空返事を返すのみ。

「（買い与えた洋服、類人猿がちゃんと着て来るか心配ですわ……）」
自分の計画で頭が一杯になっており、上条がやって来るであろう方角ばかり気にしていた。

そして数分後、御坂に近付いていく見慣れたシルエットの男を白井の視界が捉えた。

「しっ、来ましたわよ!」

3人は慌てて身を隠し、一斉に御坂の方向を凝視する。

そして上条の服装を確認した白井は小さくガッツポーズを作った。

「よ、よう、待ったか？」

「ひっ!?!」

不意に背後から声をかけられた御坂は弾かれたように背筋を伸ばす。

「べべべ、別にまま、待って……」

そのまま上条の方向に向き直った。

緊張から動作はぎこちなく、セリフも返答も相当に噛んでいる。

しかし、上条を視界に入れた瞬間、御坂は絶句し固まってしまった。

「……な……」

そこには上条が、普段からは想像も付かないような服装で立っていたから。

細身のジャケット、胸元の空いたカットソー、ブーツカットのダメージジーンズ

いつもの平々凡々な服装とは180 異なる小奇麗な恰好である。

遠方では、御坂と同じく初春と佐天も上条を見て啞然としていた。

そして、固まる二人を尻目に、歓喜に震える者が約一名。

「(よし、上手くいきましたわ!)」

白井は、固まる御坂見て『上条のファッションに見惚れている』と

判断。

自身の『御坂の上条への好感度を上げる作戦』の成功を確信した。

が、白井は重大なミスに気付いていなかった。

白井の選んだファッションは

上条に

「プッ！」

似合っていないかった。

「あっははははは！！！」

「「えっ」「」

急に嘔き出したかと思いきや今度は腹を抱えて笑い始めた御坂に驚き、上条と白井は思わず同時に声を上げる。

数十メートル離れているにも関わらず二人のそれは見事にハモった。

「あはは、アンタ何よその格好！全然似合っていないわよ！」

「お、おかしいでせうか…」

御坂は息を切らしながら、上条の背中をバシバシと叩く。

その光景は街中であり目立っており、上条は公開処刑状態となっていた。

「み、御坂さん、言い過ぎですよー！確かにちよつと似合っていないですけど」

「上条さん、泣きそうになってるよ…まあ確かにちよつとダサいかも…」

初春と佐天も、笑いを堪えながら服装にダメ出しを加える。

コーディネートした張本人が隣に居る事など露も知らずに。

「…」

まさかの結果にショックを受けた白井は、先程とは逆に一人固まっていた。

白井が選んだそれは、確かに定番のファッションであった。

だが、髪はツンツンボサボサで、身長もそれほど高くはなく、ついでに靴はいつもの運動靴。

そんな上条にはとても着こなせているとは言えなかった。

また、御坂の好みから外れていたのも痛かった。

そして、動揺する白井に追い打ちを掛けるかのように、更なる事態が発生した。

上条を笑い飛ばした事で緊張から脱した御坂が、思わぬ行動に出ただの。

「よし、今から御坂センサーがコーディネートしてあげるわ!」

「「えっ!」」

再びハモる上条と白井。

「ほら、ボーツとしてないで行こ、当麻!」

御坂はそう言うなり、上条の手を取った。

「お、おい…!」

驚く上条をお構い無しに引っ張り、そのまま手を繋いで歩いて行く。

上条に対し内気ないつもの御坂の姿はそこには無かった。

白井達3人は、御坂の行動を啞然とした様子で見送っていた。

御坂達の姿が小さくなった頃、佐天と初春がようやく口を開いた。

「ちょっと初春聞いた!? 御坂さん、確かに名前で呼んだよ!」

「はい、ハッキリ聞こえました、『当麻』って！しかも、手も握っちゃってましたよ〜！」

目を輝かせながらキヤーキヤーと興奮気味に騒ぐ二人をよそに、白井は地面に頭を打ち付けていた。

第22話：上条×黒子 ！？ 3（後書き）

上条さんがどうしても黙り気味になってしまっ…

ゴチャゴチャしていた今までのサブタイトルを修正、簡素化しました。

あと、過去に書いた小説のポイントが地味に増加していて驚きです。評価&登録して下さい、ありがとうございます。

『とある病院』を少くし改正したので良ければ覗いてって下さい。

第23話：握手大作戦？（前書き）

《あらすじ》

御坂を一時的に上条に惚れさせるべく白井は上条をコーディネートするも、結果は大失敗。
そして御坂は上条を連れてどこかへ行ってしまった。

第23話：握手大作戦？

多くの買い物客で賑わい、今日も盛況のショッピングモール。

そして出入りの激しい入り口付近で、手を繋いで歩く学生のカップルが一組、中から出て来た。

片方は、常盤台の制服を身に纏った少女。

「それじゃまたね当麻！それ、大事にしなさいよ！」

少女はそう言って少年に手を振り、掛け出していった。

表情は笑顔。光のエフェクトが勝手に輝きそうなくらい眩しい笑顔。

その笑顔から、少女は相当上機嫌である事が窺えた。

一方取り残されたのは、ホスト風ファッションに身を包んだ少年。手には少女から『大事にしなさいよ』と言われた買い物袋を下げている。

少年は去り行く少女をしばらくぼんやりと見送っていた。

そして少女が人混みに消えていった所で漸く少女とは別方向に歩き出した。

少女とは対照的にその足取りは重く、表情も疲れ切っている。

少年はポケットから財布を取り出し、逆さに振った。薄っぺらい財布からは屑がパラパラと落ちて来るのみ。

そして最後に呟く

『不幸だ…』

時刻は既に夕暮れ時であり、空はオレンジ色に染まっている。

御坂は上条と別れた後、このまま帰ろうと寮に向かって歩いていった。

「あ、いたいた！お〜い御坂さーん！！」

ふと聞き覚えのある声が耳に入り、足を止める。

声の聞こえた方向を見ると、佐天と初春がこちらに向けて手を振っていた。

その後方には、陰鬱な表情の白井の姿もあった。

「ふう、やっと見つけたあ」

「御坂さん、探しましたよ〜」

いつも二人を尾行している3人だが、今日はそれを途中までしか遂行出来ていなかった。

御坂が早足で上条を引っ張って行った事、そして白井が何故か取り乱し足手纏いになった事が原因であった。

よって初春と佐天は、御坂が上条がどこで何をしていたかをすぐさま聞こうとした。

だが…

「ねえ、あそこに入るっか！今までしてたか知りたいでしょ？」

御坂はそう言っただけで向かいのファーストフード店を視線で指した。

「え！？」

御坂の提案に初春と佐天は少々驚いた顔を見せた。

まさか御坂の方から話そうとするとは思ってもいなかったから。

だが、知りたがりの二人にとって願っても無い展開でもあった。

「あ…ぜ、是非聞かせて下さい！（御坂さんから言い出したって事は…）」

「行きましよう、是非行きましよう！（きっと上手くいったに違いないですよ〜！）」

「…ではわたくしはこれで…」

「何言ってるんですか、白井さんも聞きましょうよ〜！」
無情にもズリズリと引つ張られていく白井。

こうして4人はファーストフード店に入って行った。

4人は入店するなり揃って100円ジュースを購入。
店員の視線が少し痛かったのは気のせいだろうか。

「それで御坂さん、上条さんとはどこへ!？」

佐天は着席するなり勢いよく御坂に問いかけた。

「すぐそのショッピングモールに行つてね、あいつと一緒に洋服を選んだの!」

厳密には、一緒に選んだのではなく御坂が一方的に選んで半ば強引に買わせていたのだが。

「「おお〜!!」」

「ス…スゴイです御坂さん…一人でそこまで行動できるなんて…」

「ほんとですよ!いやあ、恋人と買い物だなんて、憧れちゃうな〜」
「!」

「ちよつと、まだ恋人なんかじゃないわよ」

「あと、シヨツピングモールに行く前、しっかり下の名前で呼んでましたよね、上条さんの事！」

「それに手も握ってました！もう恋人どこから見ても恋人みたいなもんですよ〜！」

まるで我が子の自立を喜ぶ母のように感動に打ちひしがれる初春と佐天。

御坂も、佐天の大胆なからかいに動揺する事無く対応した。相当耐性が付いてきているようだ。

このようにして盛り上がりは頂点に達し、4人は笑いに包まれていたが…

先程から一人、内心では全く笑っていない人物がいた。

「…ええそうですわね、ウフフ…。まあ、佐天さんったら、ホホ…」

それはやはり、少し前に自身の作戦が完全に裏目に出た終わった白井であつた。

3人の忌まわしき計画を狂わせるべくお姉様 類人猿の好感度を急激に上げようと企んだが、結果は大失敗。

逆に類人猿 お姉様の好感度を上げてしまった感がある。敵をアシストする結果となつてしまった最悪の結末。

しかし、自身の企みを気付かれないためにも、落ち込んでいる事は出来る限り隠さなければならぬ。

そう考え、必死に笑顔を作りながら相槌を打っているのだった。

「そういえば上条さん、なんで突然あんなおかしな恰好してきたんですかね？」

「ぶっ…！」

初春から不意に傷口を抉られ、白井は飲みかけていた紅茶を盛大に嘔き出した。

「ちょっとオドオドしてましたもんね上条さん。服はそう悪くないけど着慣れて無い感じ！」

「そうそう、あれは笑えたわよね！突然オシャレに目覚めちゃった感がもうおかしくて！アハハハ！」

「そ、そうですね、ウフフフ…（た、耐えるのよ黒子…）」

御坂を中心に盛大に笑い飛ばす3人。白井も作り笑顔で無理を押して笑う。

自業自得とはいえほとんど拷問であった。

そして話は一区切り付き、さあもうお開きかな、といった空気が流れ始めた頃。

「そうそう、御坂さんて手を繋ぐのは結構平気なんですね」

「へ？」

佐天が何気なく発したこの一言が新たな流れを作り出した。

初春も佐天に続いて口を開いた。

「言われてみればそうですね。以前：たこ焼きえを奢って貰ってた時でしたっけ。あの時も御坂さんから上条さんの手を取ってましたよね」

「ま、まあ確かに…」

御坂に嫌な予感が走った。

この流れは無茶振りフラグである。

「という訳で御坂さん、ちょっと手を貸して貰えますか？」

「え？は、はい」

御坂は言われるがままに手を差し出す。

すると、佐天はその手を取り、掌を合わせそのまま指を絡めた。

「えっ！？ちょっと…」

女同士にも関わらず、御坂は少しドキッとしてしまった。

「さ、佐天さん…！？」

釣られて初春も顔を赤らめた程である。

白井に至っては

「ギャー！ーっ！！なな、なにしてるんですのおおおっ！！」

ついに思いつきり取り乱した。

「何って、いわゆる『恋人つなぎ』ですよ！」

「「こっつ、恋び……」」

あっけらかんと答える佐天、更に赤くなる御坂と初春、頬をヒク付かせる白井。

「御坂さん、次のデートでこれやってみて下さいよ！更に恋人っぽくなりますから！」

そう言われた御坂は、まだ佐天の手と指を絡めたままの自分の手を見つめた。

「こ、これをアイツと……」

絡めた指や密着する掌から、相手の体温がハッキリと伝わってくる。確かにこんな風に手を握る事が出来れば、更に親密度は増すであろう。

上条と指を絡ませる事を想像するだけで御坂は真っ赤になる。

そんな中、白井から横やりが入った。

「ちょっとお二人とも！いつまで仲良く手を握っていらっしやいますのー!?」

「え？あつ…!」

御坂は反射的に手を離してしまった。

「え？別にいいじゃないですかー、仲良しなんですから」

佐天は特に気にしていなかった様子。
それどころか名残惜しそうである。

「そ、そうよ、別にいいじゃない！これは練習よ練習！」

御坂もあわてて同調する。

「練習ですかお姉様：ならば、黒子が手をお貸しますわっ！さぞ、どうぞ遠慮なさらず！グフフ…!」

荒い鼻息で、ツインテールを海草のようにつねうねさせ、何故か両手をワキワキさせながら、御坂に迫る白井。

その姿は握手の練習などではなく、人を襲おうとしているようにしか見えなかった。

「遠慮しとく」

当然の反応。

「お、お姉様あつ、なぜ佐天さんは良くて私はダメなんですか!? も、もしかや佐天さんと…! こうなれば力づくでええっ…!」

「うわっ! バ、バカこんな所で飛びついて来んな!」

先程までのうつ憤を晴らすような、白井の暴走であった。

「じゃあ私は初春と恋人つなぎしよっかなーっ!」

「えっ!? 何でちょっときゃあつ、佐天さんこんなところで止めて下さい〜!」

気が付けば、周囲の視線が一同に向けられていた。

「お客様、他のお客様の御迷惑となりますので…」

こうして御坂、初春、佐天は黒焦げの白井を抱えながらそそくさと退店し、それぞれ帰路に着くのであった。

帰宅後 常盤台寮

「よし、送信完了っつと」

「お姉様…なぜたった一通で30分もかかるんですの」

「う、うっさいわね！」

御坂は上条に早速メールを送っていた。

「で、お姉様、次の御予定はいつになりましたの？」

「ん？明日だけど」

「え……」

白井は少々困惑したような反応を示した。

明日も出かけるとなると、上条は4日連続で自分達に引っ張り回されている事になる。

「（お姉様、最近のペースは少々過密では……）」

「ん、何？」

「いえ別に……」

嫌な予感に襲われながらも、白井は御坂には黙っておく事にした。

「（何か起こったら起こったで、こちらには好都合ですよ……）」

数時間経過

時刻は就寝時間を回ろうとしていた。

「…あれ、今日はアイツ遅いなあ…」

御坂は少々苛立った様子でケータイを眺めていた。
上条からの返信がまだ来ていないのだ。

最初の頃と違い、最近の上条はすぐに返信をくれるようになった。
それに慣れた御坂にとって数時間は非常に長く感じられた。

「お姉様、これ以上は明日に差し支えますので今日はもうお休みに
なって下さいな」

「ハア、そうね…」

白井の進言に従い、御坂は諦めて寝床につく事にした。
以前のように返信を待ち過ぎて寝不足になっては堪らない。

マナーモードをサイレントに設定し、ベッドから離れた机に置く。

たまには遅れる時もある。

どうせ明日になればメールは来ているだろう。

そうタカをくくっているためか、御坂はすんなり眠りに着く事が出
来た。

しかし、御坂が眠っている間

ケータイが光る事は一度も無かった

第23話：握手大作戦？（後書き）

後半はありきたりなフラグの連発になっちゃいましたね…

あと、評価ポイントがあり得ない数値に…
読んでくれているみなさん、本当にありがとうございます。
そしてこれからも宜しくお願いします！

第24話：握手大作戦？2（前書き）

《あらすじ》

白井の作戦が裏目に出た事で、御坂と上条はショッピングデートに
発展。

モールから出て来た御坂は満面の笑みであったが、上条は…

第24話：握手大作戦？2

帰宅した御坂が上条宛のメールの文面を必死に考えている頃。

「と〜ま〜っ！」

「おお、落ち着いて下さいインデックスさん〜!!」

上条は立派な犬歯を剥き出しにしたたシスターに迫られ土下座していた。

インデックスと呼ばれたのは、白い修道服と銀髪が特徴的な少女。

「何なのこれ！これが夕飯だなんて冗談でも笑えないんだよ!!」

彼女がそう言って指差したのはテーブルの上。

そこには上条家の本日の夕飯が並べられている。

上条が連日の疲れを押しして何とか作った料理なのだが、インデックスはそれに怒りの矛先を向けていた。

何故なら、その献立が余りにも質素だから。

米、モヤシ炒め、モヤシサラダ、醤油。それだけである。

米は炊いただけの白米で、味付けも一切無し。醤油が唯一のトッピングである。

モヤシ炒めは、文字通り油でモヤシを炒め、コショウを掛けただけ。

モヤシサラダは生のモヤシにドレッシングを掛けただけ。
同じ食材で品目を水増ししている辺りに哀愁が漂っている。

並の人間ですら到底満足出来ないであろうこの夕食に、大食漢のインデックスが満足する筈も無く。

「今の日本には絶食の文化でもあるわけ！？とうまはともかく、私の胃袋はこんなじゃ全然満たされないんだよ〜っ！」

駄々っ子のように床でジタバタ暴れ始めるインデックス。

「だからしょうがねえだろ！今月はもう碌に金が残って無えんだっつーの！」

対して上条は開き直って、財政難である事を訴える。

しかしインデックスは納得しない。

「じゃあとつま、あれは何なの！？」

そう言っつて部屋の隅を勢いよく指差す。

その先には、昨日上条が白井に買わされたホスト風の服一式と、今日御坂に買わされたカエル柄のTシャツが乱雑に積まれていた。

「あんなの買っつて来るからお金が無くなっちゃうんだよ！！私の夕飯はあんなダサくて似合わない服より優先順位が低いつつ言うの！？」

上条は買いたくて買っつて来た訳ではないのだが、その事を知らない

インデックスは容赦無く上条を責め立てる。

「あ、あれには深い事情が…てか、似合わない言うな！」

御坂に笑われた事を結構気にしていた上条は、インデックスにまでダメ出しを食らった事で涙目になる。

しかし肝心の、服は御坂達に無理矢理買わされた物である事は言えなかった。

御坂に会っていたなんて言ったら、話が更にややこしくなってしまうと判断したからだ。

そして、上条の必至の説得も空しく、インデックスのボルテージは遂に頂点に達してしまふ。

「とうま〜〜〜！！！！！」

目をギラリと光らせた刹那、一瞬で獲物に距離を詰め、屈強な歯と顎でドタマに噛み付く。

それはまるで、どこぞの野生動物の狩りのような光景であった。

「や、やめ「ギャー」っ！！！！！」

上条は頭をブンブン振って振りほどこうとするが、食い込んだ歯は中々離れない。

余りの痛みに部屋中を駆け回るが、それでもインデックスは鯉のぼりのようにくっついてくる。

「イダダダダダ！！痛いですってインデックスさん！血が……ん？」

しかし上条は10秒程走り回った所で、急にピタッと動きを止めた。

何か固い物を踏ん付けたような感触が足元に走ったのだ。同時に、電子機器が破壊されたような音も発生。それは上条だけでなくインデックスの耳にも届いていた。何を踏ん付けたのか予測が付いてしまい、上条は真っ青になる。

恐る恐る足元を見やると

「あーっっ！」

予測通り、携帯電話がお亡くなりになっていた。

金欠極まる中での悲劇。

泣きっ面に八チであった。

「ふ…ふ…不幸過ぎ…る…ハハ」

今までの疲労、頭部の出血、ケータイを失ったショック。3つが混ざり合った事で、上条はその場に座り込み、乾いた笑い声を上げるのであった。

その頃、常盤台学生寮では。

「よし、送信完了っつと」

「お姉様…なぜたった一通で30分もかかるんですの」

「う、うっさいわね！」

御坂は漸くメールを送り終えていた。

上条家で何が起きているかなど、知る由も無く…

第24話：握手大作戦？2（後書き）

握手の要素一切無しの展開。

サブタイトル詐欺でごめんなさい。

というか24話も続けて話題が未だに握手とか恋愛小説としてどう
なんでしょう、我ながら…

そしてインデックスさんがしれっと初登場

第25話：握手大作戦？3（前書き）

《あらすじ》

御坂の次の目標は、佐天の提案で『恋人繋ぎ』となった。
それを達成すべく上条にメールを送るが…

第25話：握手大作戦？3

とある日の正午過ぎ。

今日は多くの学校が午前には下校となる日であり、多くの飲食店が賑わいを見せ始めている。

それは学生が利用する飲食店の代表格、ファーストフード店も例外では無く、とある街中の店舗は既に席の半分が埋まっていた。

そしてその中に、最近常連客となりつつある2人の中学生の姿が。

「御坂さん、もう次のデートの予定は決めてあるんですかね？」

「あれから三日も経つし、もうとっくに決まってるっしょ！ああ楽しみだな。」

御坂達の到着を待つ、初春と佐天であった。

2人はここ最近、御坂と共にとある恋愛作戦にを進行する事に夢中になっている。

その作戦とは「上条を御坂に惚れさせ、告らせ、振って上条をからかう」というもの。

あまりにも鈍感且つ恋愛に消極的な御坂を見かねた佐天のよる提案だった

これが功を奏し、「振るため」という口実を得た御坂は、上条に対し以前とは別人のように積極的に振る舞えるようになった。

特に最近は進展が著しく、連日の成功に2人は軽い興奮状態になっていた。

「もしかしたら次のデートでさ、手を繋いだついでに…キスとかいっつちゃうんじゃないかな！」

「キキ、キス！？それはちょっと早いのでは！？でも…確かに…」
大胆な事を予想をする佐天。脳内でそのシーンを想像し顔から湯気を出す初春。話の内容は、御坂にはとても聞かせられる内容ではない。そんなこんなで2人のテンションは早くも高く、御坂の到着を今か今かと待ち侘びているのであった。

そして数分後。

「あ、来た！御坂さ〜ん！」

御坂が店内に現れ、それにすぐに気付いた佐天は手を振って場所を知らせる。

それに気付いた御坂はこちらに歩いてくる。

「二人ともゴメンね、遅くなっちゃって！」

「いえ、私達も今来たばかりですよ！」

「白井さん、今日も来たんですね…」

「…初春、わたくしが居て何か不都合な事でも？」

「まあまあ2人とも、今はそんな事は置いといて！」

佐天は会って早々いがみ合う初春と白井を宥めると、早くも今日の本題を切り出す。

「御坂さん、次のデートはもう決まっただんですよね！？」

「キ…いえ、次はどこに行く事になってるんですか〜！？」

目を輝かせながら、ズズイッと身を乗り出す佐天と初春であったが

「あ、いや…それが…」

（（あれ…？））

御坂のテンションがえらく低い事に違和感を感じる2人。

そして、御坂はその口から更に驚きの事実を告げるのであった。

「実は…」

* * * * *

「ええ〜っ!?!」

店内の喧騒に負けない大声が響き渡り、他の客が一斉に振り返る。

「そんな、あれからメールが来てないなんて…!」

「しかも、御坂さんからは毎日送っているのにですか?!」

「ちよつと、2人とも声が大きいって…!」

御坂によると、三日前のモールでのショッピングデートからの直後から突然、連絡が途絶えてしまったらしい。当然、次のデートの日取りは決まっておらず。突然の失速に2人は驚きと落胆を隠せなかった。

「で、でもなんで突然?最近はずぐに返信が来てたんですよ…」
「御坂さん、前みたいに『勝負しろ』なんて送ったわけじゃないですよね」

「そ、それは流石にもう無いわよ!」

「ですよね…。うん、何か他に心当たりとかありませんか？」
「…いや、それが特に無くて…」

3日前に上条家で起こった悲劇など御坂達は知る由も無く。

「「「…」」」

停滞感の混じった気まずい空気が辺りを覆っていく。

しかし、そんな中で一つの咳払いが空気を打破する。
意外にも白井であった。

「みなさま、話はひとまず昼食を召し上がってからのほうが宜しいか
と思いますわ」

「「「あ…」」」

今まで何も注文せずボックス席を占領していた4人。
気が付けば店員の視線が痛かった。

「そ、そうね！まずは昼食をとってからにしましょうか！」

「そ、そうですね！ハハ…」

「じゃあ私が席を取っておきますから代わりに注文お願いしますね、
佐天さん」

「おっけー、じゃあ行きましょう！」

3人は初春を残し、カウンターへ向かう。

* * * * *

その後。

4人は注文の品を黙々と口に運んでいた。

時たま出る会話もどこかぎこちなく、空気ははっきりいって重々しい。

しかしそんな中で口元をニヤつかせる人物が一名。

(クヒヒ、何だか知らないですが、助かりましたのっ)

御坂達の失速を喜ぶ白井である。

3日前に実行した作戦が散々な結果に終わり、それを挽回する策も特に無い白井は手を拱いる状態だった。下手したら、近いうちにお姉さまは過ちを犯してしまうのではないか…。そこまで危惧していた白井にとって、今回の出来事は棚ボタであった。

御坂が寮で荒れるため手放しに喜べる状況ではないが、過ちを犯されるよりはマシと考える。

「…白井さん、何かニヤニヤしてませんか？」

気付けば、安堵が表情に漏れ出していたらしい。

長年のパートナー、初春には早くも気付かれてしまう。

「ふっ、言い掛かりはおよしにナって下さいまし」

外見こそ冷静を取り繕うも声が少々裏返ってしまい、初春のジト目はより一層険しさを増す。

(チツ、相変わらず鋭いですの…)

危機を感じた白井は話題を逸らす事にした。

「それより初春、佐天さんも、昼食にしては随分控えめですね」

白井がとつさに指摘したのは、テーブルに置かれた佐天と初春のメニュー。

佐天はハンバーガー1個、初春はアップルパイ1個。それにSサイズのジュースを付けただけである。

バーガーにサイドメニュー、Mドリンクのセットを注文した白井、御坂と比べるとあまりにも見劣りする組み合わせであった。

「そういえばそうよね。2人ともそれじゃ足りないんじゃない？」

「あ…これは、その…」

「え、え…つとですなぁ…」

「…?」

歯切れの悪い2人に、御坂と白井は思わず目を見合わせる。

「私達、お小遣いが今月ちょっとピンチなんですよ」

「え?」

「その、みんなでこうやって集まる事が多かったのです…」

「レベルが低いとお小遣いも少ないですしね、あはは」

「あ…!」

原因は金欠だった。

そしてブルジョワな2人はこの事態を全く予想できておらず、湧き上がる罪悪感。

「2人ともゴメン！それ、ここ最近私にいつも付き合ってくれてるからだよね！」

「わ、わたくしもその、変な事を聞いてしまって申し訳ありませんですの……」

「そんな、御坂さん達が謝る事じゃないですよ！好きで集まってるんですからっ！」

「そうですね！それに言いだしっぺは私達なんですし、2人とも全然気にする事無いですよ！」

これをキツカケに、重苦しかった雰囲気は段々といつも感じに戻っていった。

「まあ御坂さん、この話はここまでにして、なんでメールが来なくなっっちゃったのか考えましようよ！」

話題は再び戻り、3人は必死に考え始めた。

店員の目線など気にせず喧々囂々話し合った。

途中で白井が帰ってしまったが、3人は残って考え続けた。

そして数時間が経過した。

「……」

結局原因は分からないまま。

上条入院説、海外渡航説、浮気説など様々な説が飛び交ったが、どれも根拠に乏しく憶測の域を出ないものばかりであった。

今日はもうお流れか……そんな空気が流れ始めた頃。

思いきった発言が佐天の口から飛び出す。

「御坂さん、今から捜しに行きましょう、上条さんを！」

「へ？」

* * * * *

そして3人は今、店を出て外を歩き、上条を捜索している。

(うっ、やっぱりこうなるのね…)

作戦初めの頃を思い出すような急展開に、心の中で涙目になっている御坂。

上条に会いたくない訳ではないのだが、しかし、今日は心の準備ができていない。

それに、三日も連絡をくれなかった相手とどんな顔で会えばいいのか分からない。

よって今から会いに行くのは避けたかった。

佐天達はそんな事は聞き入れてくれそうにないが。

しかし御坂は同時に、佐天達は上条を探し出す事は出来ないとも踏んでいた。

(アイツがよく通る場所なんてこの子達は知らない筈だしね…)

そうタカをくくっていたが…

(あ！)

以前、ある公園でよく上条と会っていた事を2人に話してしまった事を思い出す。

そこは上条の通学路になっているのか、彼が高確率で通る場所の一つである。

(しまった…)

歩きながら冷や汗をかくが、動揺を2人に悟られまいと必死に隠す。

(どこの公園かは教えてないし、あの話自体もう忘れてる筈！)

そう願ひ、自分にもそう言い聞かせる。

数分後

「御坂さん、ここですよ！上条さんがよく通る公園って！」

「これですよ〜、上条さんがお金を呑まれた自販機って！」

(うそ…)

佐天達に難なく辿り着かれ、御坂の願ひは早くも打ち破られた。

「私達、あれから苦労してここを探し当てたんですよ〜」

「ステキな場所ですよ、実はもう何回も来ちゃってます！」

「へ、へえ…そうなんだ、八八…」

忘れるどころか、勝手に観光スポットにされていた。
2人の底無しの好奇心に恐れおののく御坂であった。

「さあ、上条さんを待ちましょう！」

「ねえ、待つって言っても時間が遅いんだし、30分くらい経って来なかったら帰る！」

「はい」

心底楽しそうな2人に、御坂は溜め息を着く。

改めて周りを見渡すと公園は夕日で赤く染まっており、上条と会った時とはまた違った風情を醸し出している。

何度も訪れている場所でありながら、御坂はこのような姿を見るのは初めてであった。

(そういえばアイツとここで会ったのって、いつも昼過ぎだったっけ。だったらこんな遅い時間に通らない筈よね)

そう思った瞬間。

「あっ！来ましたよ！」

「……………え？」

まだ待ち始めて3分も経っていない。

御坂は状況を整理できず混乱する。

「な、なな、何が？」

「上条さんに決まってるじゃないですか！ほら、あれ！」

佐天が指さす先には、こちらに何故か猛ダッシュしてくる一つの影が。
夕日が逆行となって顔はよく見えないが、頭のシルエットは忘れもしないものであった。

「じゃあ私達は隠れますから頑張ってください！」

「御坂さん、グッドラック！」

近くの草むらに素早くダイビングヘッドする2人。

「ちよっ…!!」

無情にも一人残された御坂は2人に右手を伸ばし、そのまま固まってしまう。

そして

「あれ？御坂？」

この三日間聞く事のできなかった声が、御坂の背後から掛けられる。

第25話：握手大作戦？3（後書き）

本当に、本当に遅くなりました…

この量を書くのに、ガチで4ヶ月かかってしまった…
毎日、書いては消し、書いては消しの繰り返しでした。

この投稿がキツカケとなって、以前の連載感覚を取り戻せたらいい
なあ…

第26話：握手大作戦？4（前書き）

《あらすじ》

メールを送って来なくなった上条に直接会いに行こうと佐天は言い出した。

御坂は心の準備が出来ぬまま、上条と対面する事に。

第26話：握手大作戦？4

（ああもう…！なんでコイツは都合の悪い時に限って現れるのよ…！）

背後から上条に呼びかけられた御坂は、すぐに振り向く事が出来ずにいた。

振り向いてから、どんな顔で何を話せばいいのだろうか。

こちらのメールを無視し続けた事を問い詰めるべきか。

それとも、その事はひとまず置いておき、笑顔で接するか。

いつそ逃げ出してしまうべきか。

などと全力で考えを巡らせているのだが、考えは簡単には纏まらない。

「なあ、御坂だよな？」

再度話しかけられるが、既に御坂の耳には届いていなかった。

（あれ…おかしいな）

そんな御坂に上条も少々困惑していた。

（人違いか？いや、まさかな…）

いくら日が落ちて薄暗いとはいえコイツを見間違える筈は無いと、疑念を自ら否定する。

しかし、だったら何故声を掛けても反応しないのか。

どうしたものかと悩む上条だが、ここである一計が頭に浮かんだ。

(あ、そうか、呼び方を変えれば…)

そして、早速それを実行に移す。

「なあ、ビリビリ」

次の瞬間、御坂の肩がピクッと反応する。
そして勢い良く振り返り、

「ちょっと!! いつまでその呼び方してんのよ!! 私の方は美琴って呼ぶ!!」

「なんだ、やっぱり御坂じゃん」

「あ…」

しまったと思うがもう遅い。

まんまと引っ掛かかり、上条とついに対面してしまう。

「で、こんなとこで何してんだよ」

「あ、いや…」

心構えや言葉の用意が済んでおらず、目線が泳ぎまくる御坂。
冷静に考える余裕も無く、とっさに思い浮かんだ事を反射的に口に
してしまうのだった。

「その…な、何してんだじゃないっての！アンタ、今日に限ってこんなところ通ってんじゃないわよ！…てか、ちゃんと美琴って呼びなさいよ！なんですぐ元に戻っちゃうわけ！？」

「ええ！？いきなり何なんですか！？人がどこを通ろうが…」

いきなり責め立てられる上条。

特に理不尽極まりない前半の内容に思わず反論が出るが、それを途中で呑みこんだ。

自分はある目的地に向かって急いでいた事を思い出したのだ。

「てか、こんな事してる場合じゃねえんだよ！美琴、ちよつと付き合ってくれ！」

「へ？あつ、ちよつ…！」

それは御坂からすれば突然の出来事だった。

2、3歩分離れた場所にいた上条が突然近づいて来て、手を唐突に取って来たのだから。

更に、その手を強く引つ張られる。ついでに名前と呼ばれていた。

（な、何なの！？）

久々に繋いだ手から、上条の体温が伝わってくる。

しかし、今の御坂にはそれを堪能するヒマなど無かった。

なぜなら、手を引く上条の走りが、あまりにも全力だったから。

「ちよつと、なんでそんなに急いでるの！？…てか、どこに向かってるのよ！」

「お前の助けが必要なんだよ！だから今は黙って付いてきてくれ！」

「はぁ！？」

説明する間も惜しいのか、それとも相当に焦っているからか、具体的に欠ける上条の説明。

そんな只事ではなさそうな様子を見て、御坂は一抹の不安を抱く。

（まさかコイツ、また何かの事件に巻き込まれてる！？メールが来なかったのもそのせいなの？）

だとしたら、コイツの危機は自分が救う。以前の借りを返すためにも！

そう決心し、御坂は上条と共に全力で走る。

「佐天さん、二人とも、行っちゃいましたよ！」

「御坂さん、惜しい！今、手は握ってたけど恋人繋ぎじゃなかったなあ」

「そんな事気にしてる場合じゃないですよ！早く追いかけてみましょう！」

* * * * *

それから約30分が経過した頃。

ある建物の自動ドアが無機質な音を立てて空間を開放し、そこから御坂と上条が姿を現した。

「いやあ、今日もいい物がたくさん手に入った！これで上条さんはしばらく餓死せずに済みそうですよ！」

両手に戦利品を抱えながら語る上条の表情は、戦場を勝ち抜いた戦士の顔だった。

乱れた着衣と切れた息が、建物の中で何か壮絶な事が行われていた事を物語っていた。

「…」

対して御坂は無言だったが、上条は構わず言葉を続ける。

「ありがとな、美琴！またお前のおかげで助かったよ、今度また何か奢…」

しかし言葉は最後まで続かなかった。

御坂が突然、言葉の代わりに雷撃をぶつけてきたのだ。

「どわっ！…！」

上条はそれを幻想殺しで打ち消すが、間一髪だったために尻もちを付いてしまう。

その際に両手の荷物が地面に激突し嫌な音が響いたが、上条には聞こえていない。

「お前、何でいつもいきなり攻撃して来んだよ！」

「うっさいわね！人が心配して付いて来てやったら単に買い物しに来ただけとかふざけてんじゃないわよっ！」

御坂が怒っている理由。

それは、上条に連れて来られた先が、危険な場所では無く

単なるスーパーマーケットだったから。

上条が必死の形相だったのは追われているのではなく

タイムセールに遅れないためだった。

ちなみに以前行ったスーパーとはまた別の店舗である。

「？なんだよ、心配って」

「何でもないわよっ」

御坂は腰を手に当ててぶっきらぼうに答ると、そのまま先を歩いて行ってしまふ。

そして上条に聞こえない程度の小さい溜め息を付いた。

(はあ… たく相変わらずなんだから)

上条の鈍感さに呆れつつも、御坂は少々ホツともしていた。

肩すかしではあったが、上条に危険が迫っている訳では無かったから。

そして何より、上条に再会できた事は何なかんだで純粹に嬉しかった。

(…まったく、相変わらずだな…)

相変わらずかと思っているのは上条も同じだった。両手のビニールを持ち直すと速足で御坂に追いつく。

そして2人はそのまま並んで歩きだす。

「…」

しばらく、奇妙な沈黙が続いた。

(…てか、あの事聞き出さなきゃ)

御坂は歩きながら、今日の目的を思い出していた。

上条に会いに来たのは、買い物に付き合うためなんかではなく、メルを絶たれた理由を聞き出すためである事を。

だが、それを聞き出すのは少し怖くもあった。

もしかしたら、自分を嫌いになったのがその理由だったらどうしよう

三日という時間で、そんな弱気な事を思ってしまう事もあったから。

しかし、少なくとも今日の上条からは、自分を嫌うような様子は特に見えなかった。

自分と接する態度は概ねいつも通りであるよう思える。

(…きつと…きつと大丈夫な筈!)

自分に言い聞かせながら決心を固め、上条の方を向く御坂。
しかし、丁度そこで道が分岐に差し掛かる。

「それじゃ、俺こっちだから。今日もありがとな」

「ちょっと、それじゃじゃないわよ！、買える前にしっかり説明して貰うわよ！」

「へ？何をだ…？」

「決まってるでしょ！私からのメールを何回も無視してくれたワケよ！」

「ああ、その事が。実は…」

第26話：握手大作戦？4（後書き）

メールが来なくなつた理由とは一体何なのか（棒）
こんなネタばれな展開でスミマセン；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5406/>

とある少女の恋愛作戦

2011年9月10日15時20分発行